

蝦夷地への派遣 ― 島田(谷)元旦が果たした役割とその成果 ―

山下真由美¹

The Documents of the Investigation in Ezo by Shimada (Tani) Gentan

Mayumi YAMASHITA¹

要旨 島田(谷)元旦(一七七八〜一八四〇)は、谷文晁の弟として江戸に生まれ、後に鳥取藩江戸留守居役を務める島田家の養子となった人物である。元旦は、寛政十一年(一七九九)に幕府の命を受け蝦夷地調査隊の一員として蝦夷(現在の北海道)に渡り、紀行文や写生図を数多く残した。それらは往時の北海道の歴史やアイヌの文化を語る上で欠くことのできないものとなっているが、その内容は多岐にわたり、また幾種類もの写本が流布する一方、自筆本を確認できないものがあるなど、成果資料の整理は手つかずの状態にある。そこで本稿では、元旦の蝦夷地調査の成果の全体像を把握することを目的とし、併せてこれらの資料に表れた様々な特徴とその生成の理由について当時の元旦の状況を通して考察する。

キーワード: 島田(谷)元旦、蝦夷、谷文晁、円山応挙、松平定信、風景写生図、アイヌ風俗画

はじめに

一八世紀後半から幕末にかけて、鳥取藩では宋紫石に南蘋派を学んだ土方稲嶺をはじめ、長崎出身で中国風の画風を色濃く示した片山楊谷や、伝統的な狩野派に琳派ややまと絵などの装飾性を加味した沖一峨、その弟子の根本幽峨といった多彩な画家たちが活躍し、豊かな画壇が形成された。この鳥取画壇を語るのに欠くことのできない人物の一人が、本稿で取り上げる島田(谷)元旦(一七七八〜一八四〇)である。元旦は谷文晁(一七六三〜一八四〇)の弟として江戸に生まれ、享和元年(一八〇一)、二四歳の時に鳥取藩江戸留守居役の島田家の養子となった。公務の傍ら積極的に絵の制作にも励んでいたとみられ、濃彩による繊細な花鳥画などが数多く今に伝わっている。

元旦は鳥取藩士となる以前の寛政十一年(一七九九)に幕府の命で蝦夷地(現在の北海道)に派遣され、道中の紀行文や風景・風俗・器物図などを手がけている。これらの資料は往時の蝦夷地の姿を知り、アイヌの文化を語る上で欠くことのできないものとなっているが、その内容は多岐にわたり、ま

た幾種類もの写本が流布する一方、自筆本を確認できないものがあるなど、成果資料の整理は手つかずの状態にある。そのため本稿では、元旦の蝦夷地調査に関する資料を分類整理し、その全体像を把握することを第一の目的とし、併せてそこに表れた様々な特徴とそうした特徴が生まれた理由を当時の状況から考察する。まず第一章において、元旦が蝦夷地に赴いて残した著作ならびに図画資料を紹介し、他の資料と比較しながらその特徴を探る。次に第二章にて、第一章で紹介した蝦夷地調査の成果資料と文献の記述とを照合し、制作当時の資料が今にどのように残っているのかを確認する。そして最後に第三章にて、当時の元旦の活動や置かれていた環境から、元旦の蝦夷地調査の成果に表れている様々な特徴が生まれることとなった要因を探ることとしたい。以上により本論では、元旦が蝦夷地調査において担った役割とその意義を明確にし、それらの資料の背後に見える、若き日の元旦を形作った社会的・文化的時流を捉え

¹鳥取県立博物館 〒680-0011 鳥取市東町 2-124
Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan
E-mail: yamashita-ma@pref.tottori.jp

ることを試みたい。

さて、本論に入る前に幕府と蝦夷地の関係を簡単に概観しておこう。江戸時代、蝦夷地は長らく松前藩がアイヌとの交易権を独占しており、藩は蝦夷地の事情が外部に出るのを防ぐさまざまな禁制を定めていたため、幕府には蝦夷地の地理や風土、アイヌの風俗について十分な情報の蓄積がなかった。ようやく幕府による最初の蝦夷地調査が行われたのは天明五年(一七八五)、当地の富源の開發を視野に入れてのことであったが、老中・田沼意次の失脚とともに調査も中止される。しかし、ロシアやイギリスの船が活発に來航し国防の緊急性が強まるに及び、寛政一〇年、幕府は近藤重蔵や最上徳内ら調査隊を派遣し実情を調査、その結果、松前藩に蝦夷地の管理能力がないことが判明し、翌年一月には東蝦夷地を直轄することとなった。同年三月に松平信濃守忠明が蝦夷地取締御用掛に任命されるとともに多数の人員が派遣されたが、この中に採葉隊の一員として含まれていたのが元旦である。

第一章 元旦の蝦夷地調査の成果

寛政一一年(一七九九)三、四月、蝦夷地が幕府の直轄となって最初の幕吏らが江戸を出発した。松平忠明、大河内政壽、三橋成方の三有司を筆頭にして、その数八〇〇余人⁽¹⁾。元旦は幕府の奥詰医師で菓鴨を始め各所の菓園を管理する渋江長伯(一七六〇～一八三〇)を隊長とし、菓園勤務の近藤元良や、本草家の土岐新甫などが属する三四名の採葉調査団に連なつた⁽²⁾。江戸から奥州街道を経て三厩に着き、松前に渡って太平洋に面する北海道東岸を進み、厚岸で折り返してほぼ同じ道程で帰途につく約半年間の旅である。現在元旦の手になると推定される資料は、自筆・写本を含めて著書が二種、図画は一〇種ある。まず著書二種について、その内容や特徴を述べ、次に図画資料一〇種について、風景、器物、風俗、動植物の四つの主題ごとに紹介し、内容を考察することとする。

(一) 著書

① 『蝦夷蓋開日記』(以下、『元旦日記』)【写本】

寛政一一年三月二二日に江戸を発し、七月二日に厚岸に到着後、九月二七日に江戸に帰着するまでの道中を毎日記した紀行文。地理的情報(村名や山・

川の名、距離など)や、元旦が積極的に地元の人々に取材する中で聞き取つたその地の産物や地名の由来などに加え、道中での人々との交流や目にした風景などに対する元旦の感想も交えて記されている。また挿図として植物二図、太刀、木像、フキの葉を傘代わりに用いるアイヌの様子が各一図、計五図が簡略に描かれている。なお、この『元旦日記』は、『近世紀行文集成 第一巻 蝦夷篇』(板坂耀子編、葦書房、二〇〇二年)に、函館市立中央図書館本を定本とした翻刻が収録されており、本稿中の『元旦日記』の引用はこれに拠ることとする⁽³⁾。文末には「東都 谷元旦記」と記されるが自筆本は未だ見つかっていない。『蝦夷蓋開記』、『蝦夷記』、『蝦夷日記』、『蝦夷紀行』、『蝦夷地紀行』、『蝦夷秘録』等多くの別名があり、管見の限りで二〇冊近くの写本が確認でき⁽⁴⁾、おそらくもっと多くの写本が全国に所蔵されていることと思われる。この写本の多さは、本日記が蝦夷に関する重要な文献のひとつであったことを示しているだろう。

ところで本紀行は、採葉隊の隊長であった長伯の蝦夷紀行文『東遊奇勝』(函館市立中央図書館蔵、自筆、一三巻)と重複する箇所が多く、特に地理的情報についておおよそ同一の内容が記されている。しかし、別行動をした場合にはそれぞれ異なつた記述となっているほか、長伯は『東遊奇勝』の中で二度、「谷元旦」と元旦の名を登場させ(六月二日、七月二日)、『元旦日記』の中にも「渋江子」、「渋江君」、「渋江氏」と計八回長伯の名が記されているため、両者がそれぞれ日記を認めていることは疑いない。地名などの内容が重複するのは、多くの情報量を盛り込むことを目的として、互いに(あるいは一方が)照合させているためではないかと考えられる。そして、厚岸から折り返し同道を戻ると文章量が減るが、『元旦日記』は往路にくらべ生き生きとした個人め両者とも文章量が減るが、『元旦日記』は往路にくらべ生き生きとした個人的な感想や所見が多く記され、自由な意見の発露が増えている一方、長伯の記述量の減少は極端となっている。長伯のこの往路と復路の記述量の偏りから、往路において、たとえば「西北の峯、白雪旭に映じて銀のごとし。」(四月一四日)、「時ならぬ雪なれば寒き事を覚へずして面白き景色なり。」(四月一八日)、「石法雛紋、画も及ばざるがごとし。」(六月二七日)といった個人的な感想までが両者で重複する点についても、もとは元旦の記述であったと考えられる。

② 『蝦夷積名』【写本】

和語とアイヌ語を対照して記述した一種の和夷辞典。写本のみで伝わっており、先の『元旦日記』や、後に紹介する『蝦夷風俗図式』、『蝦夷器具図式』に付属する形態をとる。東京都立中央図書館所蔵の『蝦夷風俗図式并積名』などには、「蝦夷積名」のタイトルの後に「谷元旦文啓撰」と記され、元旦の編集になることが明示されている（「文啓」は元旦が青年時代を中心に用いていた名）。天文、歳時、人倫、身体、言語、器用、衣服、食用、舟、家室、草木、鳥獸、虫、魚、貝、物数の一六部に分かれ、五〇〇近い語数が所収されている。「月」や「日」、「男」や「女」といった一般的な単語以外に、「此の貝は何」、「此の草は何」、「此木は何」など、元旦らが旅の中で実際に使っていたであろう語句が収録されている。

(二) 図画—風景

③ 『東蝦夷紀行（蝦夷奇勝画稿）』（以下、『画稿』。個人蔵）三卷【自筆】

タテ約四〇センチ、ヨコ八・五センチ〜一〇五・九センチと長短様々な紙に風景が描かれたもので、三巻の卷子に計一四〇図が貼り込まれている（第一巻五四図、第二巻五三図、第三巻三三図、各図のタイトル等は【表1】のとおり）。各巻の表装には題箋が貼られており、一部文字が見えているものの摩耗して解読できない（図1）。第一巻の巻頭には題字「眼界真趣」と年紀「寛政己未季冬為谷季画博」が、「柴邦彦」、すなわち柴野栗山（一七三六〜一八〇七）によって記されており（図2）、元旦が蝦夷地から帰って間もない寛政一年の冬には完成していることが知られる。第三巻末の二図が奥州の風景である以外はすべて、蝦夷の景色となっている。各景は、勢いのある墨線を基調とし、青や緑の彩色が加えられているが、彩色が巻物の台紙の上にも伸びているところがあるため、道中では墨画によるスケッチのみ行われ、後に卷子に仕立てた時に彩色されたと考えられる。海に突き出した大岩や崖、行く手を阻む滝などの海岸沿いの難所を中心に、山中の景色や、川の向こうに広がる山並みなどが描かれ、随所に元旦と覚しき帯刀の人物が登場する（図3〜7）。

『画稿』の描き方の特徴としては、目の景色を自然な広がりの中で捉え、その場に立って見ているような臨場感を持っているという点が挙げられる。また、多くの場面で画中の人物が立つ地面が海などで遮られることなく画面

下部まで地続きに描かれていることも、より観る者に描かれた景色との距離を近く感じさせることに成功している。そして一般的な絵図とは異なり、山並みや海岸線、道筋や川の流れなどが単調に陥ることなく描写され、躍動感のある生き生きとした精彩を放っていることも大きな特徴である。以上のように『画稿』は、陸に立った時に目の前に広がる、海岸沿いの難所を中心とした蝦夷の各地の詳細な地形を現在のカメラやビデオの代わりに記録した、臨場感溢れる絵画的要素の強いスケッチとなっている。

このスケッチを浄写したと考えられるものが、後述する『蝦夷山水図巻』四卷（北海道立近代美術館蔵）と『蝦夷地真景図巻』二卷（個人蔵）であるが、『画稿』はさらに、約半世紀の後に目賀田守蔭（一八〇七〜八二）によって制作された蝦夷の風景図にも引用が確認できる。それは『蝦夷歴検真図』と呼ばれる大部の風景写生図で、安政四年（一八五七）から翌年にかけて、蝦夷地から樺太にまでわたる大規模な調査に随行した成果をまとめたものである。多くの類本が存在するこの『蝦夷歴検真図』について鶴岡明美氏は、「絵地図と絵画の中間的存在」の系統の一つとして、『北海道歴検真図』（六冊、三二九図、国立公文書館蔵）を挙げ、この中に元旦の『蝦夷山水図巻』からの借用がみられることを指摘している⁵⁾。『北海道歴検真図』と同構図の元旦の風景図は、『蝦夷山水図巻』よりも『画稿』の方がより近似しており（図8・a、b、c）、守蔭は地形の構図や人物と家屋の配置、植生などもほぼそのままに『画稿』から写し取っていることがわかる。この『北海道歴検真図』にみる『画稿』から引用された図を【表1】に加えているが、『画稿』の第一巻からは五四図中一六図が、また第二巻からは一三図が引用されており、『画稿』の三割近くが転用されていることがわかる（ただし、第三巻は二図と少ない）。守蔭は文晁の娘婿で、元旦の甥にあたることから、守蔭は元旦（あるいは島田家）と直接関わりを持ってこの『画稿』を見たとみられる。以上のように、守蔭描く『北海道歴検真図』には、元旦らの踏査した地域と重なる場所に元旦の蝦夷風景図が引用されており、元旦の『画稿』が幕末の蝦夷地調査にも活用されていることがわかる。これは取りも直さず元旦のスケッチが、よくその地の景観を捉えていることの証左であろう。

④ 『蝦夷山水図巻』（四巻、北海道立近代美術館蔵）【自筆】

『蝦夷山水器具図巻』として、山水図四巻と器具図一巻の計五巻が一つの

【表1】

『画稿』					目賀田帯刀 『北海道歴検真図』	
No.(※)	技法	月日	タイトル	画中の主な書き入れ	No.(※)	タイトル
題字			眼界真趣			
1-1	着色	4月22日	発三馬到松海上眺望図			
1-2	着色	—	—	松前城下、弁天島、観音丸、イハキ山、タツビ山		
1-3	着色	4月28日	地蔵山上眺望図			
1-4	着色	4月28日	渡及川望七面山		3-21	渡及川望七面山
1-5	着色	4月28日	炭焼澤山中眺望		3-22	炭焼沢山中
1-6	着色	4月28日	白神崎図			
1-7	着色	4月28日	炭焼澤望松前大嶋		3-20	炭焼澤望 松前大嶋
1-8	着色	—	—	白上山中	3-21	白神山中
1-9	着色	4月28日	吉岡嶺眺望			
1-10	着色	4月28日	シラフ村			
1-11	着色	4月28日	白布村海濱奇勝			
1-12	着色	4月晦日	知内川眺望		3-14	知内川眺望
1-13	着色	4月晦日	盛越村眺望			
1-14	着色	5月1日	大ハケ		3-5	茂辺地村 大ハゲ
1-15	着色	5月1日	六條間眺望			
1-16	着色	5月1日	ハケクラ眺望			
1-17	着色	5月2日	七井濱眺望図		3-3	七重浜眺望
1-18	着色	5月5日	大沼嶺眺望			
1-19	着色	5月5日	駒嶽全望又日内浦山			
1-20	着色	5月5日	小サワラ村眺望		1-19	砂原駒ヶ嶽
1-21	着色	5月6日	発キナヲシ濱到エトモ海上眺望			
1-22	墨画	5月9日	—	アドモ山		
1-23	着色	5月9日	発枝登茂到白鳥間海上眺望			
1-24	着色	5月9日	発枝登茂到白鳥間海上眺望			
1-25	着色	5月9日	白鳥間眺望			
1-26	着色	5月9日	白鳥間海上眺望			
1-27	着色	5月9日	白鳥間海上眺望			
1-28	着色	5月9日	白鳥間眺望海上			
1-29	着色	5月9日	白鳥間海上眺望			
1-30	着色	5月9日	エテツケレ山中眺望			
1-31	着色	5月9日	エテツケレ山傍海巖行		1-26	シツカリ海岸
1-32	着色	—	イタンキノ嶋望絶壁		1-35	ハシ別イタンキ岬
1-33	着色	5月10日	ハシヘツ上り崎眺望		1-36	ハシ別 二
1-34	着色	5月10日	タルホツケ		1-37	タルホツ
1-35	着色	5月10日	ヨクナキウヘンヘ川図			
1-36	着色	5月10日	ウエンヘツ山中望ノボリヘツ山図			
1-37	着色	5月10日	アヨロウエンベツ山中眺望二		1-38	アヨロ ウエン別山中
1-38	着色	5月10日	アイロヘツ図			
1-39	着色	5月11日	渡シキウ川望首九山図		1-39	首九川
1-40	墨画	—	—	チキヨノ山		
1-41	着色	5月12日	シヤタイベツ眺望			
1-42	着色	5月12日	タルマイノボリ			
1-43	着色	5月12日	—	シコツノ山、タルマイノホリ、シヤタイ、シラライ		
1-44	着色	5月24日	ニイカツフ石壁			
1-45	墨画	—	其二			
1-46	着色	5月24日	シコツウラ ウセナイ白濱図		2-8	ウセナイ白濱
1-47	着色	5月28日	大コツナイ真景		2-9	大コツナイ真景
1-48	着色	6月2日	過イマニタノホリヲ望テツカカモイ図			
1-49	着色	—	其二	テツカカモイ、ノツシュツフ		
1-50	着色	6月7日	三石真景			
1-51	着色	6月7日	浦川勝景			
1-52	着色	6月7日	チノミシリ岩山			
1-53	着色	6月7日	ホルベツ真景			
1-54	着色	6月7日	浦川エトフヨニ			
2-1	着色	—	二			
2-2	着色	—	三			
2-3	着色	—	四		2-4	ニイカップ海浜
2-4	着色	—	五			
2-5	着色	6月9日	シヤマニノサキ真景			
2-6	墨画	—	—			
2-7	着色	6月9日	ヒラカ真景			
2-8	着色	6月9日	ブヨシユマ石門図			
2-9	着色	6月9日	テリケウシ真景		2-5	—
2-10	着色	6月9日	ヲヨイノホリ真景			
2-11	着色	—	全			
2-12	着色	6月9日	チコシキリ真景			
2-13	着色	6月9日	チコシキリ真景			
2-14	着色	6月9日	ヲホイノホリ瀑布図			

2-15	着色	6月10日	シュモシベツ真景			
2-16	着色	—	—	トハハツ	2-21	トワベツ海岸
2-17	着色	6月11日	カモイミシタラ図		2-22	ビタヌケ
2-18	着色	6月11日	カモイミシタラ眺望			
2-19	着色	6月12日	ウエンベ石門図			
2-20	着色	6月12日	ウヘンヘシ			
2-21	着色	—	ニ			
2-22	着色	—	其三		2-23	—
2-23	着色	—	其四	ベシトムクシュシ		
2-24	着色	6月13日	トモツクシ真景			
2-25	着色	—	ニ		2-18	エリモ崎
2-26	着色	6月13日	下ルヒナイ坂図		2-24	ビナイ海岸
2-27	着色	6月6日	ルベシベノ崎眺望			
2-28	着色	6月13日	過シラルンヘ川到此			
2-29	着色	6月13日	シラルヘツ山中傍川上過此獨木橋			
2-30	着色	6月15日	ヒロノ川真景			
2-31	着色	6月16日	ヒヨロ真景			
2-32	着色	6月18日	トルカヤニ図			
2-33	着色	—	チツテヤブ山			
2-34	着色	6月16日	チヨブシ真景		2-25	チヨウブシ真景
2-35	着色	6月19日	セウケヒ瀑布図			
2-36	着色	6月19日	コブカルシ図		2-28	コブカルウシ
2-37	着色	8月19日	ホコイ瀧図		2-29	ホコイノ滝
2-38	着色	6月20日	ハシキル瀧図		2-32	バシロ
2-39	着色	6月21日	白抜シヤクシウシ真景			
2-40	着色	6月24日	久寿里真景		2-33	釧路
2-41	着色	6月27日	シツホシベウシ図			
2-42	着色	6月27日	過ポンヨマヘ到ウコツナイ海濱真景			
2-43	着色	6月27日	ヲコツナイ			
2-44	着色	6月27日	ヲコツナイ瀑布図			
2-45	着色	6月27日	ワタラ石門図			
2-46	着色	6月27日	ヲシヨツナイ			
2-47	着色	6月20日	カチロポイ図		2-35	カツラコイ
2-48	着色	6月27日	ワタラヒチセイ石門図			
2-49	着色	6月29日	ホロナイ真景			
2-50	着色	6月29日	マタウシ図			
2-51	着色	6月29日	ヤニクナイ			
2-52	着色	6月29日	ア子ハクラウシ真景			
2-53	着色	6月29日	ツボマナイ チエツフウシ眺望			
3-1	着色	—	ボウワタラベツ			
3-2	着色	—	ベシヤトマリエトフウ			
3-3	着色	7月1日	発センホウシ到アツケン船中真景			
3-4	着色	—	—	イセシビハ、チヤシユシ、シヲヘ		
3-5	着色	7月9日	久須利望アカン山図			
3-6	着色	7月10日	クスリよりコンブムイノ間石門			
3-7	墨画	—	—	コルプチイワハ、ヲタベツノボリ		
3-8	着色	7月20日	モヘツ山中望浦川図			
3-9	着色	8月2日	チリベツ眺望			
3-10	着色	8月2日	ヘケロタ瀧眺望		2-37	センポウジ
3-11	着色	8月2日	テバイヘツ望内浦岳			
3-12	墨画	8月3日	渡ヲルベツ望臼岳			
3-13	着色	8月3日	ヲサルベツ図 望臼嶽及諸山図			
3-14	着色	8月3日	臼濱善光寺図			
3-15	墨画	8月3日	臼善光寺晚景			
3-16	着色	8月5日	径チヤケナイ至辨部川			
3-17	着色	8月5日	フレベシ真景			
3-18	着色	8月6日	シヤクナイ山中望シリウチ山			
3-19	着色	—	—	ベタヌヘトツケ、シヤシナベトコ		
3-20	着色	8月5日	チヤシメ望ムイ鳶			
3-21	着色	8月6日	ヲシヨウシナイ瀑布図			
3-22	着色	8月9日	ユウラツフ眺望			
3-23	着色	8月10日	ホリコモノ山上眺望			
3-24	着色	8月14日	経ヨリキヨウタン至シレトコ海濱眺望			
3-25	着色	8月14日	恵山ノ腹眺望	1-12	恵山東面	
3-26	着色	8月14日	恵山ノ中眺望			
3-27	着色	—	—			
3-28	着色	8月15日	根田内濱真景			
3-29	着色	8月15日	—	立岩		
3-30	着色	8月15日	—			
3-31	着色	8月15日	ムイノボリ山中望			
3-32	着色	9月17日	松山図			
3-33	着色	9月17日	チヤガ崎阪			

(※)No.の数字「○-△」は「第○巻(冊)の第△図目」を意味する



【図3】『画稿』2-25（個人蔵）



【図1】『画稿』第一巻表装（個人蔵）



【図2】『画稿』題字（個人蔵）



【図4】『画稿』2-14「ヲホイノホリ瀑布図」（個人蔵）



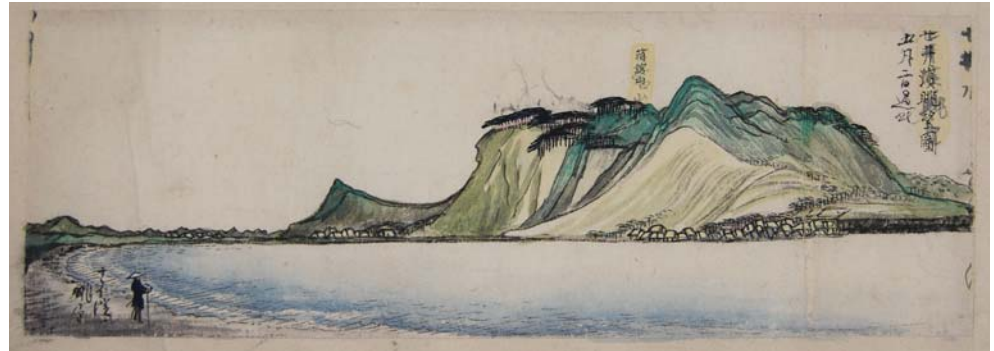
【図6】『画稿』1-8「白上山中」（個人蔵）



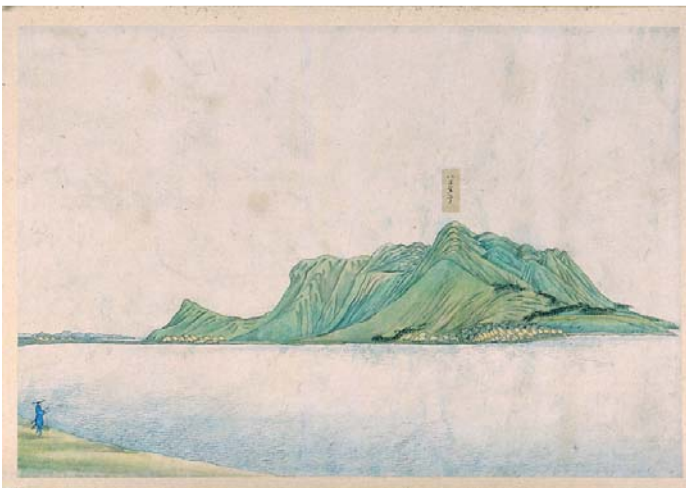
【図5】『画稿』2-35「セウケヒ瀑布図」（個人蔵）



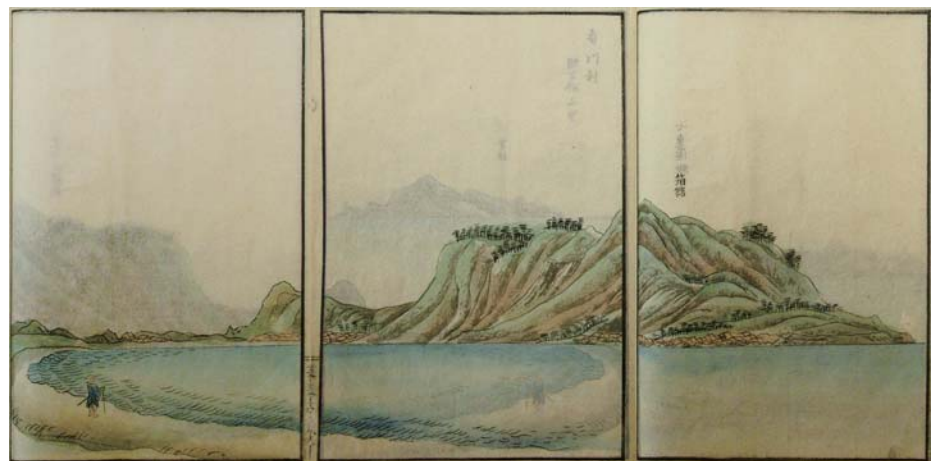
【図7】『画稿』1-39「渡シキウ川望首九山」(個人蔵)



【図8-a】『画稿』1-17「七井濱眺望図」(個人蔵)



【図8-b】『蝦夷山水図巻』1-10「七井濱眺望図」(北海道立近代美術館蔵)



【図8-c】『北海道歴検真図』3-3「七重濱眺望」(国立公文書館蔵)

箱に収められている。各巻は同じ表装であり、外寸のタテはすべて約二七センチと一揃いのものであるが、風景を描いたものとして、ひとまず山水図巻四巻について紹介し、器具図巻については後述する。

山水図巻の各巻には一八図ずつ計七十二図の蝦夷の風景を描いた紙が貼り込まれている。軸表の題箋は「蝦夷山水圖」と記され、一〜四の番号が振られている（【図9】）。各図のタテの大きさは二五・五〜七センチで、ヨコは三五・〇〜一二九・九センチ。先行研究において、本図巻がもと冊子であったと推定されているが^⑥、各図に目立つた折り目跡は見当たらず、また横幅の最長は約一三〇センチであることから、当初から卷子であったとみられる。各図の冒頭には赤い付箋（タテ約一四・一センチ、ヨコ約二・五センチ）が貼られ、謹直な書体で地名が記されている。また本紙の中にも地名を書いた小さな紙が貼り込まれている。作者については、各巻末に文晁の印が捺されており（【図10】）、箱の蓋表にも「蝦夷山水圖 谷文晁畫 長谷川如水珍藏」と墨書されている。しかし文晁の印影には疑問が残り^⑦、先行研究においても文晁は蝦夷に渡ったことがなく、元旦の筆になる可能性が指摘されている^⑧。また後述するように、本巻の続きと考えられる図巻が近年再発見され、そこに元旦の落款があることから、本図巻の作者は元旦である可能性が高い。

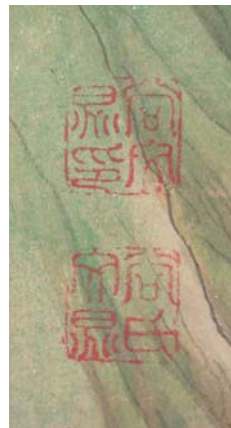
さて本図巻は、七十二図の風景図のうち九割にあたる六五図が、①の『画稿』の中に同構図の風景を見つけることができ（例：【図8・a】と【図8・b】や、【図11・a】と【図11・b】など）、『画稿』にみる一次写生らしい勢いのある墨筆に替わって緑や青を中心とする美麗な彩色や細筆による丁寧な筆運びとなっている。このように『画稿』を浄写したものと考えられる本作は、幕府に提出するために制作された可能性もあるだろう。『画稿』における躍動的な筆致とは異なる、細い筆を慎重に運ばせた動きの少ない硬質な画面からは、岩絵具による鮮やかな彩色と相俟って、どこか桃源郷のような非現実的とも言える雰囲気醸し出されている。スケッチから本画へと浄写される中で起こるこうした変化は他の画家にもしばしば見られることであるが、その具体的な変容と意図については、元旦の『諸国名所図』（栃木県立博物館、フアナック株式会社蔵）や文晁の真景図などを含めて考察する必要があるだろう。



【図11-a】『画稿』2-30「ヒロク川真景」
（個人蔵）



【図11-b】『蝦夷山水図巻』3-18「ヒヨロヘツ図」
（北海道立近代美術館蔵）



【図10】『蝦夷山水図巻』
印章〈原寸大〉
（北海道立近代美術館蔵）



【図9】
『蝦夷山水図巻』第一巻表装
（北海道立近代美術館蔵）

⑤ 『蝦夷地真景図巻』(二巻、個人蔵) 【白筆】

近年再発見された、乾巻と坤巻からなる二巻本。坤巻にのみ軸表に題箋が貼られ、「谷元旦筆山水図」と書かれている(【図12】)。巻末には「寛政十一年己未冬月谷元旦謹畫」の書き入れと朱文方印(「元旦之印」)が捺され(【図13】)、元旦が蝦夷地から帰ってきた年の冬、すなわち帰着後すぐに制作したものであることがわかる。各巻末の台紙部分に「月明荘」の印が捺され、古書肆の反町茂雄氏の旧蔵であったことが知られる。また本作は、昭和六一年の天野氏論考⁹⁾の中で触れている谷元旦筆「蝦夷山水真景図」(二巻)と図の内容や特徴が一致するため同一のものと思われる。論文掲載時は高倉新一郎氏の所蔵であったようである。二巻を収める箱の表には、「蝦夷地真景図巻」と記されており、本稿での作品名はそれに拠った。

乾巻には二図(有珠山と厚岸湖が描かれる)、坤巻には「ホウワタラヘツ図」(【図14】)、「ヘシャヘトマリエトフウ図」、「アイカツフ図」(【図15】)、「アフツナイ眺望図」、「ムセウシ眺望図」、「エサン図」の六図、計八図の蝦夷風景が収められている。各図のタテの大きさは二五・四〇二六・八センチ、ヨコは四二・九一四一・三センチ。先の『蝦夷山水図巻』と絵の筆致がよく似ており、本紙タテの寸法がほぼ同寸であるほか、本紙と赤い付箋の材質や寸法、付箋の文字の書体も『蝦夷山水図巻』と酷似する(【図16・a】と【図16・b】)。さらに、乾巻の一図と、坤巻の三図に『画稿』を元図としたと考えられる同構図の風景があり(【図17・a】と【図17・b】)、また『蝦夷山水図巻』が『画稿』の第一巻と第二巻に元図が見つげられる一方、『蝦夷地真景図巻』は第三巻にそれを見出すことができることから、本図巻は、もとは『蝦夷山水図巻』の続きであったものが、ある時点で分離したものと判断される。

⑥ 『谷文晁奥羽遊歴写生模本』(二巻、東北大学附属図書館蔵) 【写本】

タテ一七・六〇一八・二センチ、ヨコ一三・二〇六九・七センチの紙に、草加駅(現在の埼玉県草加市)から伝法寺坂(青森県十和田市)までの奥州街道沿いの風景が描かれた模本で、二巻の卷子に上巻一九図、下巻三三図の計五二図が収録されている(【図18】)。収録範囲は広いが、岩手県北部から青森県三厩までの図は二図しかなく、ばらつきがある。巻頭には題字「東垂攬勝」と年紀「寛政己未」が柴野栗山の落款とともに写されている。この巻

物は谷文晁作品の模本として古くから認識されてきたもので、それはおそらく文晁が松平定信(一七五八〜一八二九)に従って白河に何度か足を運び、『無題巻物(谷文晁東北地方写生図)』(東北大学附属図書館蔵)なども残しているためであろうが、本作については近年、内山淳一氏によって詳しく紹介され、元旦作の模本の一部である可能性が提示されている¹⁰⁾。内山氏が指摘しているように、寛政一年当時の文晁が置かれていた状況や、『元旦日記』の記事にみる景色とこの模本の風景図とが一致する点などから、本作の原本は元旦の筆になると考えられる。現在、元旦が蝦夷地に渡る前後に通過した奥羽地方を描いた風景写生図は、先の『画稿』巻末の二図しか見つかっていないため、この模本は、元旦の奥羽街道写生図が存在していたことを示唆する貴重な資料と言える。

以上の四点が、元旦の寛政一年の蝦夷地調査に関連して制作された風景を主題とした資料であるが¹¹⁾、寛政一年より前に、幕府の命を受けて蝦夷に赴き作画を行った人物がいるので、先行するその作例と比較し、相違点を確認しておきたい。

その人物の名は、小林豊章(生没年不詳)といい、生没年はおろか、出身地も現在までのところ明らかとなっていないが、寛政四年に蝦夷へ渡った後、同一二年、そして文化四年(一八〇七)の少なくとも計三回、幕府の命により蝦夷地を訪れており、「蒙公命(中略)地理山川海岸等且ツ人物及ヒ草木鳥獸魚類等ニ至ル迄具サニ絵面二図シ可捧旨」¹²⁾と、元旦同様に図画の制作を命じられている¹³⁾。豊章の風景を主題とした作例としては寛政四年の『蝦夷見取絵図』(三巻、国立公文書館蔵)などがあり、舟から陸をみた景観が描かれている。横に長く続く巻物に陸地を地続きにして遠くから描き、随所に地名や距離が書き入れられ、所々に貼られた付箋には、その地での宿泊形態やその地を出船した日付が記されている。舟での航路や行程を知ることができ、船から見える陸地の風景が立体的に表されていることで、地理や位置を舟上で視覚的に判断できる描き方となっている。

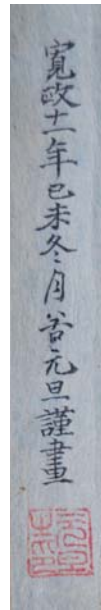
一方の元旦は先に見たように、『画稿』と『蝦夷山水図巻』では描法が異なるものの、両方とも歩きながら目にした陸からの景観が中心となっている。険峻な巨岩が立ちはだかる難所、海に流れ落ちる滝や奇岩、奇島などが描かれ、概して距離が近く、随所に元旦日本人と思しき人物が描き込まれていると



【図16-a】
『蝦夷地真景図巻』
題箋（個人蔵）



【図16-b】
『蝦夷山水図巻』題箋
(北海道立近代美術館蔵)



【図13】
『蝦夷地真景図巻』落款
〈原寸大〉（個人蔵）



【図12】
『蝦夷地真景図巻』
表装（個人蔵）



【図14】『蝦夷地真景図巻』坤巻「ホウワタラヘツ図」（個人蔵）



【図15】『蝦夷地真景図巻』坤巻「アイカツフ図」（個人蔵）



【図17-a】『画稿』3-25「恵山ノ腹眺望」(個人蔵)



【図17-b】『蝦夷地真景図巻』坤巻「エサン図」(個人蔵)



【図18】『谷文晁奥羽游歴写生模本』「葦神橋眺望」
(東北大学附属図書館蔵)

おり、その地に立つて見える景色が一面ごとく描かれている。

このように風景の捉え方について、豊章が舟上からの地理的情報を提供する視点に立つ一方、元旦は海岸線を中心とする具体的な地形や難所などの情報を視覚的に提供していると言えよう。寛政四年と同一一年の幕府の動向に目を向けると、寛政四年の時点で蝦夷地は未だ松前藩がアイヌとの交易権を有し事実上支配していたものの、幕府は「御救貿易」としてアイヌとの交易を宗谷と石狩で試み、同時に千島、樺太の調査も行って辺境の情報を収集している時期であった。豊章が描いた各地の沿岸の地形や特徴を海の側から示した海路図は、磁針の方位を頼りに沿岸を目視しつつ航行するのが普通であった当時、幕府の貿易船や調査船の便宜と安全のために必要なものであったと言える。一方、直轄が決まった寛政一年には、天文観測により方位を定めて外洋を航海することが可能となっており、また同年に蝦夷地取締御用掛に命じられた羽太正養は「蝦夷の地は盡く嶮岨にして通路自在ならず、所としては人蹟を絶え、其海岸搔送り舟をもつて漸々に通路をなすといへども、風順よからざれば舟行の道をたち、徒に風を待て日を送る。かくては事あらん時急を告るに妨あり、亦常に往來の煩ひなれば、ことごとく道を開て通路をつけ、往來の煩なからしめ、又数理の間旅宿なければ、旅行のもの野宿の勞にたえず、前にいふ所の官舎を建て旅宿とせん。先是等の数事をさしあたる所の急務として手を下さむ。」⁽¹⁴⁾と道路の開削と官舎の建造を第一としている。こうした状況から、元旦が描く難所を中心とする陸地の視覚情報を提供する風景写生図は、新道の開拓整備といった幕府の政策を反映しており、そのような用途に供されたと考えられる。

(三) 図画―器物

⑦ 『蝦夷器具図式』（二冊、個人蔵）【自筆】

紙本墨画淡彩、三六丁。タテ二八・四センチ、ヨコ二〇・七センチ。多くの写本が存在し、写しを重ねる段階で正確性を欠いた描写となっているものもある中で、鳥取県内の個人が所有するものが対象を的確に捉えていることから自筆本と考えられている。後述する『蝦夷風俗図式』（一冊）とともに伝えられており、両図式は安達美術より複製が出版されている⁽¹⁵⁾。家屋、舟、橋などの建造物から、漁具や燭台、食器などの生活道具に至るまで、さまざまな器具が一三六図収められているが（図19～21）、一図のみ器具には含

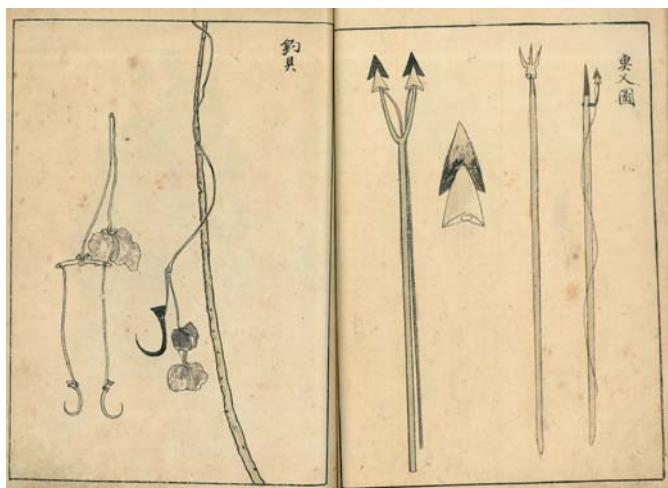
まれない図柄（「釣夫」【図22】）が含まれている。おおよそ道具の種類別に分類されており、ほとんどの図（一〇五件）には日本語で名称が記され、部分的にアイヌの方言や用途などの傍注が加えられている。漁具などの仕様の詳細や檻の中の熊や鷹の姿などを巧みに描写しているが、筆致は概して簡略で、大刀図などは鞘の文様を部分的に描くなど、省略も見られる。

⑧ 『蝦夷器具図巻』（一巻、北海道立近代美術館蔵）【自筆】

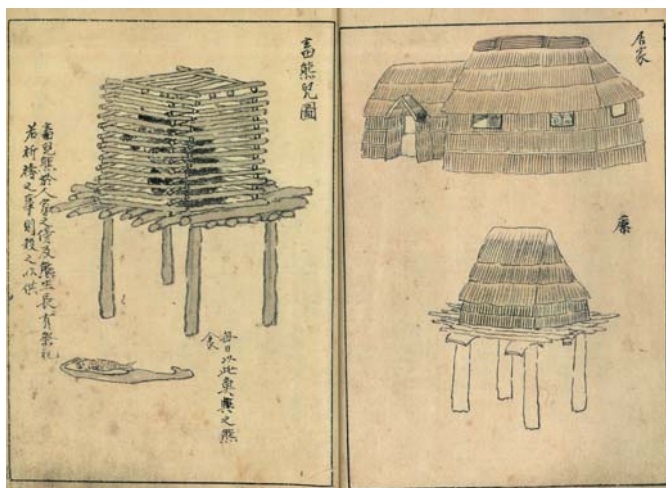
先の『蝦夷山水図巻』と一揃いの図巻である。紙本著色。タテ二五・五センチ、ヨコは二一・八二・〇センチと長く継いだ紙に、家屋や橋、舟のほか、さまざまな器物が一二〇件配置され、各図には日本語で名が記された赤い付箋が貼られている（図23）。題箋には「蝦夷器物屋宇圖全」と記されている。

「燧火」の一図以外の一一九図は『蝦夷器具図式』に同図を見つけることができる。『蝦夷器具図式』では異なる頁に描かれていることもあった同種の器物が分類整理され、器具には当てはまらない「釣夫」が除かれているほか、一部しか描かれなかった文様が全面に描き込まれ、胡粉による彩色も加えられている（図24）。題箋の文字は謹直で、各器物の描写も丁寧かつ慎重な筆運びとなっており（図25）、『蝦夷器具図式』をもとに浄写したものと判断される。

以上の二種が、元旦が手がけた器物を主題とした作例である。元旦以前に蝦夷の器物をまとめて描いた作としては、小林豊章の『蝦夷カラフトサンタ打込図』（四巻、寛政四年、早稲田大学附属図書館蔵）の第三巻があり、ここでは石狩の木造船、宗谷と樺太にて写生した煙草入れや酒箸などの器物、そして「サンタン人道具類」として笠や刀・鍋など、計六三種の器物が描かれている。元旦と豊章の間に直接的な図様の転用はみられないが、両者が写し取った器物の種類は一致するものが多く、これは恐らく両者ともその土地で目にした器具類を可能な限り写し取ろうとした結果であろう。また豊章は、樺太での写生として生活器具だけでなく、蝦夷錦の帯や玉など主要な山丹交易の品々を多く収め、特に玉石を描いたものには発色豊かな岩絵具を用いるなど大変丁寧に描いており、寛政四年当時、「御救貿易」を行っていた幕府が交易品に着目していたこととの関連が考えられる。一方の元旦の器物写生図には、そのような交易品となりそうな器物は見当たらず、基本的に一種類



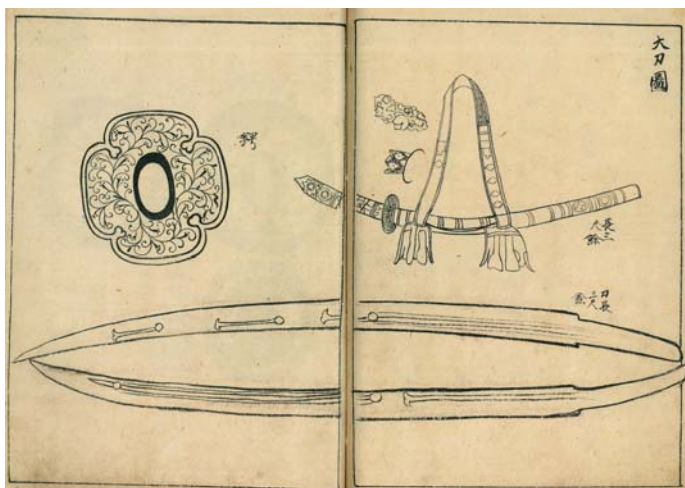
【図20】『蝦夷器具図式』「魚叉圖」、「釣具」
(個人蔵)



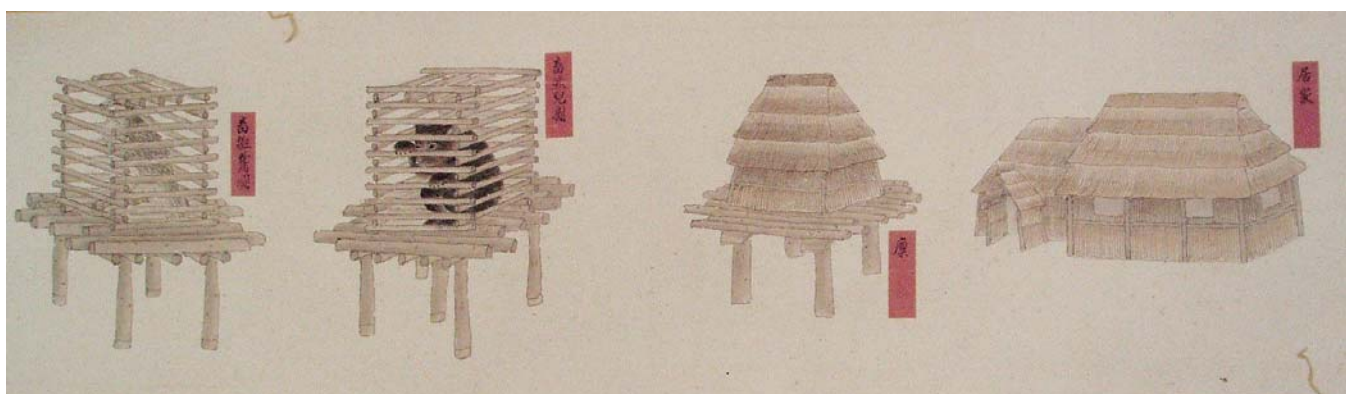
【図19】『蝦夷器具図式』「居家」、「廩」、「畜熊兒圖」
(個人蔵)



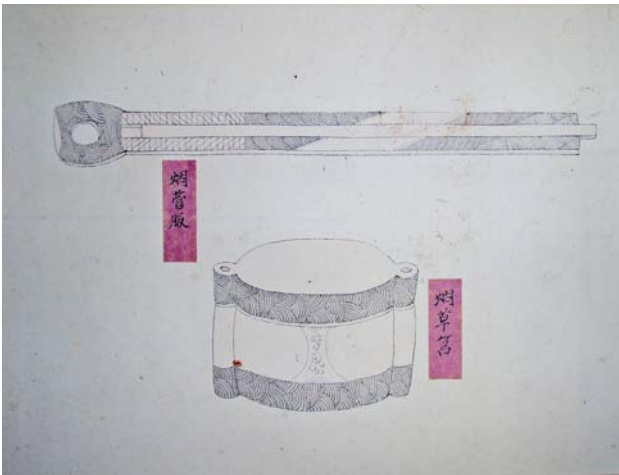
【図22】『蝦夷器具図式』「釣夫」
(個人蔵)



【図21】『蝦夷器具図式』「大刀圖」、「鉦」
(個人蔵)



【図23】『蝦夷器具図巻』「居家」、「廩」、「畜熊兒圖」、「畜雛鷺圖」(北海道立近代美術館蔵)



【図25】『蝦夷器具図巻』「烟管版」、「烟草筒」
（北海道立近代美術館蔵）



【図24】『蝦夷器具図巻』「佩刀」〈部分〉
（北海道立近代美術館蔵）

一点ずつ、東蝦夷地に住むアイヌの生活に根ざした器物類を、釣具類、機織道具類、刀剣類等、大まかに分類分けを行いながら幅広く所収することを目的としていると考えられる。

(四) 図画—風俗

⑨ 『蝦夷風俗図式』（一冊、個人蔵）【自筆】

紙本墨画淡彩、一九丁。タテ二八・四センチ、ヨコ二〇・七センチと『蝦夷器具図式』と同寸であり、ともに鳥取県内の個人が所蔵する。

機織りをする女性や狩猟をする男性、子供たちが遊ぶ様子など七一名にのぼる人物が描かれ⁽¹⁶⁾、アイヌの暮らしのほか、舞や三日打という儀礼や慣習なども写し取っている。人物の描写は、細く流麗な墨筆で輪郭を形作って淡彩を施し、衣文線に沿って薄墨を刷き立体感を出すなど、丁寧で動きのある筆運びとなっている。

『元旦日記』中の「予を見てあぐらをかき、手を二三度上へ上る。土人に聞は、蝦夷の礼なりといふ。」（五月五

日）という内容に合致する「蝦夷人拝儀図」（図26）や、「酒を与ふればよるこび、一人仰で臥し謡ひ出し、胸を叩て、式人は薪にて拍子をとる。」（五月九日）という記述を想起させる「夷人戯舞図」（図27）などがある。また『元旦日記』からは、元旦がアイヌの人々と木の葉を的にして射を競う遊びを行ったり（六月二日）、童子に葉草を採取するよう頼んだり（七月一日）、道中で童子から水を与えてもらう（七月十八日）など、アイヌの人々と親しく接している様子がうかがえることから、「蝦夷人観獵図」（図28）や「蝦夷童子遊戯図」（図29）なども、こうした交流の中で実際に目にした光景であったのであろう。約四ヶ月という移動しながらの短期的な滞在で元旦が見聞できたアイヌの風俗には限りがあり、たとえば幕府の命で何度も蝦夷に渡り、測量や農業・漁業の指導等を行った村上島之允（一七六〇—一八〇八）の著作に見られるようなアイヌの文化に対する深い洞察は見られない⁽¹⁷⁾。しかし『蝦夷風俗図式』には、アイヌ文化に特徴的な儀礼だけでなく、ご飯を食べる姿や、座談しながら煙草を回し喫みしている様子、子どもの遊びなど、何気ない日常生活も描かれており、滞在中に出会ったアイヌの人々を普段の生活も含めて筆の許す限り余すところなく記録しようとする元旦の姿勢がうかがえる。

⑩ 『蝦夷国風図式』【写本】

自筆本は確認されていないが⁽¹⁸⁾、多数の写本があり、丁数は一五〜一六丁となっている。アイヌの人々やその住居などのほか、海に面した険峻な岩肌を調査隊が蜘蛛のように這い蹲って渡る様子など一五図が描かれている。各図のタイトルは次のとおり⁽¹⁹⁾（題名のないものは便宜的に設定し、括弧内に記した）。

- 一、「蝦夷人乙名之図」〈図30〉
- 二、「アイヌの女性と子どもの図」
- 三、「イルカノ魚ヲ喰」図
- 四、「蝦夷人家山海図」
- 五、「運上屋之図」
- 六、「蝦夷人家図」
- 七、「先年飛驒屋久兵衛請負場騒動之跡」図
- 八、「蝦夷船ニテ渡海ノ図」
- 九、「蝦夷地往返難場図」〈図31〉
- 一〇、「廻島ノ砌野宿ノ図」
- 一一、「念佛坂難所之図」
- 一二、「同前図」
- 一三、「同前図」
- 一四、「同前難所トモツクシ之図」
- 一五、「同前図」

本書に題名はついていないが、アイヌの風俗や様々な風景の中の人々が捉えられているため、本稿では便宜上『蝦夷国風図式』とした。この『蝦夷国



【図27】『蝦夷風俗図式』「夷人戲舞図」（個人蔵）



【図26】『蝦夷風俗図式』「蝦夷人拝儀図」（個人蔵）



【図29】『蝦夷風俗図式』「蝦夷童子遊戯図」（個人蔵）



【図28】『蝦夷風俗図式』「蝦夷人觀獵図」（個人蔵）



【図31】『蝦夷国風図式』
「蝦夷地往返難場図」（アイヌ民族博物館蔵）



【図30】『蝦夷国風図式』
「蝦夷人乙名之図」（アイヌ民族博物館蔵）

風図式』は多くの場合、先の『蝦夷風俗図式』・『蝦夷器具図式』とともに合本されており、大塚和義氏がこれを「『圖式』三部作として位置づけたい」としている⁽²⁰⁾、まさしく当初はこの『蝦夷風俗図式』も風俗・器具両図式とともに組として揃っていたのではないかと考えられる。

⑪『毛夷武餘寫図』（二幅、個人蔵）【自筆】（図32）

海に面して奇岩がそびえ立つ蝦夷の海岸風景を舞台に、六人のアイヌの人々を老若男女取り混ぜて配置した風俗画。絹本着色、タテ五五・〇×ヨコ八七・五センチ。画中には「毛夷武餘寫圖 庚申夏月寫於小蕉林」と記され、寛政一二年、蝦夷地調査の翌年の夏に制作されたことがわかる。

蝦夷地調査に関するたくさんの図画資料を残している元旦であるが、鑑賞絵画としては本作が唯一の作品となっている。描かれた人物の衣服や器物などについては大塚氏論考に詳しく⁽²¹⁾、「武餘寫」が「冬島（北海道日高支庁南部）を指すこと、本作は蝦夷地の真景図の最初であること、さらに人物の配置や構成は元旦の創作ではなく円山応挙の「四条河原納涼図」から引用していることが新明英仁氏によって指摘されている⁽²²⁾。書き入れにある「小蕉林」がどこを指すかは不明であるが、本作と同じ年の夏に文晁門人の亜欧堂田善によって『海浜アイヌ図』が制作されていることは、本作の制作背景を考える上で何らかの手がかりとなるかもしれない。

（五）図画―動植物

元旦が動植物を描いた資料は、先にみた『元旦日記』中の植物二図しか見当たらないが、同日記中には、たとえば「土岐」新甫生、花を持来り、予に写生せん事を乞ふ。因て其花をうつし、深更にいたり寝ぬ。（四月二十八日）とあり、また「夜にいたり花蘭を写生す。」（同月晦日）、「網にて取し魚ほしかれい、石もちの類、并磯貝、大蛤、ほつき貝、ほたて貝など種々写生す。」（五月三日）、「此日採葉し、草木の花、五六品写生す。」（同一七日）など、植物や海産物などを写生している記事が散見される。そして、「渋江（長伯）子は山に出て採葉す。予、旅館に留主す。終日、草木を写生す。」（六月四日）、「白抜にて逗留し終日草木の類を写生す。」（六月二一日）、「土岐（新甫）生、野辺に出、採葉し帰る。予に写さん事をはかる。」（七月二九日）など、長伯や新甫など採葉隊のメンバーが収集した草木類を、同所に逗留中にまと

めて写生するという分業体制となっていたこともうかがえる⁽²³⁾。寛政一一年の採葉隊の調査成果は、腊葉標本として東京大学総合研究博物館と北海道大学総合博物館に膨大な数が残されているが、写生図としては『蝦夷草木写真』という図鑑のみとなっているため、本資料の詳細をみていくこととする。

⑫『蝦夷草木写真』（一冊）【写本】

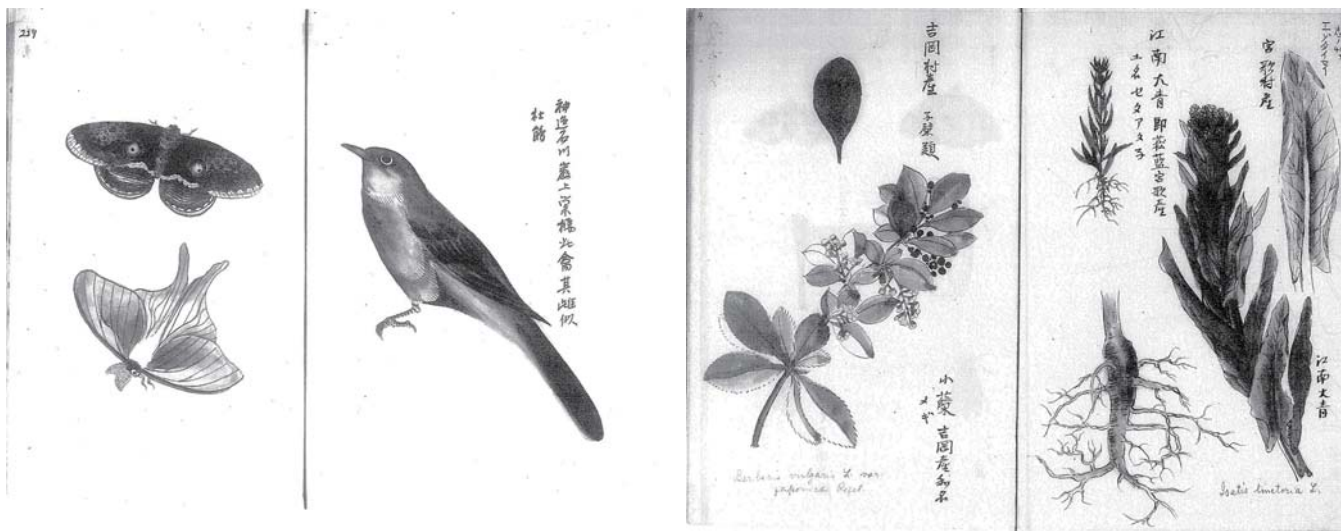
植物を中心に貝類や虫獣類も含まれた二五四丁からなる大部の図鑑。渋江長伯の著として知られるが、著者名および成立年の記載はない。彩色の写生図に名称が書き込まれ（図33）、所々に採取地や採取月日が記されており、寛政一一年の元旦ら採葉隊の足取りと一致することから、彼らの採取の成果であることが確かめられる。『元旦日記』から元旦が多くの植物等を写生していたことは明らかであるが、それらのまとまった写生図が見当たらない現在、『蝦夷草木写真』に元旦のスケッチが含まれている可能性は高いだろう。これを補うために、描法等から筆者の特定を試みるべきところであるが、本図鑑は管見の限り国立国会図書館が所蔵する明治二四年（一八九一）の写本しかなく⁽²⁴⁾、元の図の線描や彩色についてうかがうことは難しい。また、元旦の植物写生図は他に例を知らないため比較できず、ただ、明治時代に植物学者の宮部金吾氏によって学名が書き入れられていることから、原図は植物図譜として対象を的確に捉えていたと推測されるのみとなっている。

（六）まとめ

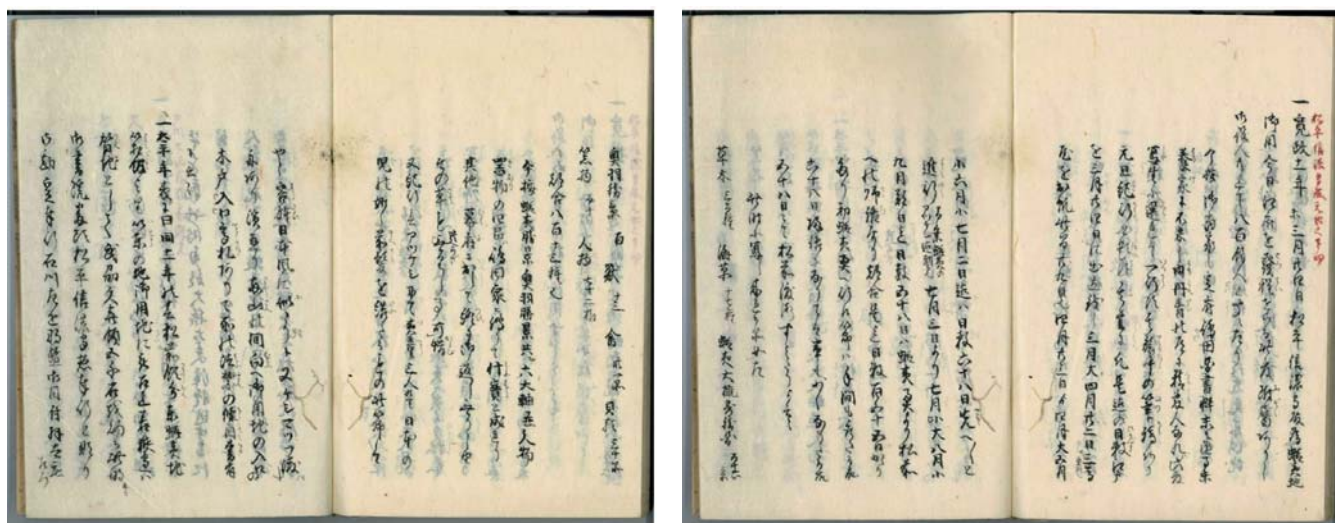
以上、元旦の蝦夷に関する成果資料を主題ごとに紹介してきたが、中でも『元旦日記』、『蝦夷積名』の二種の著書と、『蝦夷器具図式』、『蝦夷風俗図式』、『蝦夷風俗図式』の三種の図画資料、計五種はいずれも複数の写本があり、ともに合冊されていることが多い。管見の範囲で比較的成立時期が古く原本に近い状態を伝えていると考えられるものをまとめると【表2】のようになる⁽²⁵⁾。○印の中の番号は、各種の合冊の順番（番号が振ってある場合はその順番）を記している。この中で、自筆本と確認できるのは（ア）のみであるが、（イ）の東京都立中央図書館本と（ク）のアイヌ民族博物館本は、描かれたものの大きさや配置などが自筆本とぴったり同じであり、さらに薄い紙に描かれていることから自筆本を敷き写した、かなり初期段階での写本と考えられるものである。これにより、この五種が、当初から組であったも



【図32】『毛夷武餘鳶図』（個人蔵）



【図33】『蝦夷草木写真』（国立国会図書館蔵）



【図34】『見聞略草稿』（鳥取県立博物館蔵）

【表2】

（ア）	（イ）	（ウ）	（エ）	（オ）	（カ）	（キ）	（ク）	（ケ）	（コ）	タイトル	所蔵 （請求記号）	冊数	『元旦日記』	『蝦夷積名』	『蝦夷国風図式』	『蝦夷風俗図式』	『蝦夷器具図式』	
	「蝦夷風俗図式并積名」 「蝦夷器具図式」	「蝦夷記行図」	「蝦夷紀行」	「蝦夷紀行画図」	「蝦夷積名」	「蝦夷紀行附図」	「蝦夷紀行」	「蝦夷紀行」	「蝦夷紀行」	個人	東京都立中央図書館 （特別室上文庫四一三七） 北海道大学附属図書館 （旧館00051） 函館市中央図書館 （旧館00051） 天理図書館 （二七一九一三五） 岩瀬文庫 （二二一三三） 早稲田大学 （二六一〇二五三〇）	二冊						
										蓬左文庫 （二二一〇三三四〇）	二冊	①	②	③	④	⑤		
										刈谷市中央図書館 （村上文庫六三三七）	四冊	①	④	②	③	⑤		
										アイヌ民族博物館	六冊	①	④	②	③	⑤		
											一冊	①	④	①	②	③		
											二冊	①	①	③	④	②		
											一冊	①	③	①	②	④		
											五冊	④	①	①	②	③		
											二冊	①	②	②	③	④		
											二冊	①	②	①	②	③		

のか、後に合本されたかは不明ながら、もともと体裁が整い内容の揃ったものとなっている。

また元旦の蝦夷地調査に関する資料全体を一覧にすると【表3】のようになる。【表3】には元旦と前後して幕府の命で蝦夷へ派遣された小林豊章と村上島之允の主要な著作一覽を加えたが、それらと比較すると、元旦の蝦夷地滞在期間は約四ヶ月と短期であったにも関わらず、実に多種多様な資料を残していることがわかる。

第二章 文章と図画の照合

前章では、現在に伝わる元旦の著書及び図画資料を挙げ、その内容を紹介、整理してきた。本章ではそれらを、『元旦日記』中に元旦が記述した写生品目の内容や数量と照合させ、制作当時の資料が現在にどのようなかたちで、どの程度残っているのかを確認する。

『元旦日記』冒頭には、「予亦図画の事に役せられ、その国風、人物、山水、器用、産物等をうつしき。」とあり、末尾はこう締めくくられる。

写し来りし品、草木三百種、海品十七種、蝦夷大概奇勝図百十六景、奥羽勝景、百獸十三禽三十一品、貝類三十品、器物百十、人物七拾式様、都合八百三十一品。蝦夷行の談柄をなすのみ。日数、都合百八十一日なり。

これにより元旦は、草木と風景の写生を中心に、計八〇〇を超す膨大な数の写生図を認めることが判明する。しかしこの『元旦日記』末尾の写生品目の記述は、写本によって語句や数字に若干の異同があり、「海品」か「海草」かなど、記述を省略しているものも多い。特に、「奥羽勝景」の後の「百」は勝景の数であると考えられるが、「百獸」と続けて表記されていたり、合計の品数が八三一品と八一三品の二種類があったりする。その中で本稿で掘り所としたいのは、鳥取藩土岡江洞江齋景貞（生没年不詳）が纂集し、門人の岡嶋正義（一七八四～一八五八）が補った『増補 異説見聞略草稿』（以下、『見聞略草稿』。鳥取県立博物館蔵）中の記述である。そこには、次のように記される（【図34】、句読点筆者）。

今按、御当家の定府嶋田図書悻末之丞事、未

養家に不來し内、丹青の道に精敷人なれば此度

写生に選れて一行す。其旅中の筆稿あり。

元旦紀行と題す。（中略）

此時に写し来れる品如左

草木三百種 海草十七種 蝦夷大概奇勝図百十六景

奥羽勝景百 獸十三 禽三十一品 貝類三十品

器物百十 人物七十二様

都合八百十三種也

今按、蝦夷勝景奥羽勝景共二六大軸、並人物器物の四品ハ嶋田家二伝りて、什寶と成れり。

其他ハ幕府に出して終に御返し無りし由、

【表3】

	谷(島田) 元旦	小林 豊章	村上 島之允	目賀田 帯刀
風景	『東蝦夷紀行(蝦夷奇勝画稿)』 〈寛政十一年(1799)〉 (個人蔵)	『蝦夷見取絵図』 〈寛政四年(1792)〉 (国立公文書館蔵)		『北海道歴検真図』 〈安政五年(1868)〉頃 (国立公文書館蔵)
	『蝦夷山水図巻』 〈寛政十一年(1799)〉 (個人蔵)	『樺太島東西浜図』 〈文化二年(1805)〉 (函館市中央図書館蔵)		
器物	『蝦夷山水器具図巻』 〈寛政十一年(1799)〉 (北海道立近代美術館蔵)	『蝦夷カラフト サンタン打込図』 〈寛政四年(1792)〉 (早稲田大学図書館蔵)	『蝦夷島奇観』 〈寛政~文化〉 (東京国立博物館蔵ほか)	
	『蝦夷器具図式』 〈寛政十一年(1799)〉 (個人蔵)			
風俗	『蝦夷風俗図式』 〈寛政十一年(1799)〉 (個人蔵)		『蝦夷風俗図説』 〈寛政~文化〉 (函館市中央図書館蔵)	
	『蝦夷国風図式』【写本】 ※一部風景含む			
動植物	(『蝦夷草木写真』【写本】) 〈寛政十一年(1799)〉	『蝦夷草木図』 〈寛政四年(1792)〉以降		
紀行	『蝦夷紀行』【写本】 〈寛政十一年(1799)〉		『蝦夷見聞記(別名:松前考)』 【写本】〈寛政十年(1798)〉 (東京大学図書館蔵) ※図は伝存せず	
	『蝦夷釈名』【写本】 〈寛政十一年(1799)〉			

その草も遺らざりし事、可惜。

元旦は蝦夷地調査後の二年後に、鳥取藩の江戸留守居役・島田図書の子となっており、通称を末之丞といった。「草木」以下「都合八百十三種也」までの品目の記述は、語句の並びが『元旦日記』と同じであることから、ここからの抜粋と考えられ⁽²⁶⁾、併せて島田家に伝わる品を記すなど著者が同家と直接的な関わりをもっていると察せられることから、この品目の記載は、より『元旦日記』の原本に近い情報をもっていると判断される。したがってここからは、『見聞略草稿』に記された『元旦日記』の記述を基に、前章でみた元旦の執筆物を振り分けてみたい。比定される資料をまとめると【表4】のようになる。

まず、第一章で紹介してきた資料の中で、『元旦日記』に記す「蝦夷大概奇勝図」一一六景に該当するのは、蝦夷の風景を描いた『画稿』、『蝦夷山水図巻』、『蝦夷地真景図巻』の三種である。しかし『蝦夷山水図巻』ならびに『蝦夷地真景図巻』の計八〇図の多くは『画稿』から一部を抜き出して浄写したものであるため、ここでは『画稿』(一四〇図、蝦夷地風景のみであれば一三八図)を指すとみるのが妥当であろう。そして「奥羽勝景」図は『画稿』の巻末二図以外には伝えられていないが、『谷文晁奥羽歴史写生模本』(五二図)の原本が該当する可能性が高く、岩手県北部から青森県にかけての写生図が二図しか見つかっていないことから、あと五〇図近い数の風景写生図があったのではないかと推定される。そして『見聞略草稿』には「蝦夷勝景奥羽勝景共二六大軸」とあることから、『画稿』の三巻以外に残り三巻があったことになる。『見聞略草稿』の聞き書き時期は不明ながら、正牆適処による嘉永六年(一八五三)の序があることから、この頃まではこの六大軸と併せて「人物器物の四品」が島田家に伝わっていることがわかる⁽²⁷⁾。

次に、『元旦日記』中の「器物百十、人物七十二様」は、『見聞略草稿』の「人物器物の四品」にあたりと考えられるが、これに該当するのはまず、『蝦夷風俗図式』と『蝦夷器具図式』の二冊が挙げられる。『蝦夷国風図式』は、厳密には人物・器物に当てはまらないものも含まれるが、アイヌの男女・子どもや室内に置かれた器物などが描かれていることから、人物・器物図のひとつである可能性を提示しておきたい。こうして四品のうち三品が揃ったこととなり、残るもう一品の発見が待たれるところであるが、これらの三品の写本が多く流布し、【表2】でみたように全五種でもっとも揃った形態であ

【表 4】

計八一三種	禽	獸	貝類	海草	草木	器物	人物	奥羽勝景	蝦夷大概奇勝図	写生対象	『元旦日記』の記述				
	三一品	一三	三〇品	一七種	三〇〇種	一一〇	七二様	一〇〇	一一六景	数量					
						四品			六軸			員数	『見聞稿』の記述 現存する資料		
『蝦夷草木写真』 【写本】						『蝦夷器具図式』			『画稿』			タイトル			
鳥類	魚類	虫類	貝等	海草	植物	人物	器物	器物	人物	奥羽勝景	奥羽風景	奥羽風景		奥羽風景	内容
一種	一種	二種	三二種	一八種	二九一種	一四	一三五四	一四	七一人	五二四	二四	一三八四		四数	
一冊 (二五四丁)						一冊 (三六丁)			一冊 (一九丁)			二卷	三卷	員数 (丁数)	

るため、この五種以外に新たに加わるとは考えにくい。また、【表2】の(イ)・(オ)・(カ)・(キ)にみるように、『蝦夷積名』が『元旦日記』とは離れ図式三種と合本されていることから、「人物器物の四品」の残り一品は『蝦夷積名』である可能性が考えられるだろう。あるいは、『蝦夷風俗図式』(一九丁)や『蝦夷国風図式』(一五〜一六丁)に較べ丁数が倍ほどある『蝦夷器具図式』(三一六丁)が二冊本であったという可能性も考えられるかもしれない。

最後に、草木・海草・貝類・禽獸は、第一章にて『蝦夷草木写真』が該当する可能性を考えたが、『元旦日記』によると草木写生図数は三百種にのぼると記され、『蝦夷草木写真』にも二九一種の草木が掲載されており、ほぼ合致する。また草木以外では、『元旦日記』にて海草一七種と記されるのに対し、『蝦夷草木写真』では一八種、貝類三〇品に対し三二種(貝、ヒトヅ、甲殻類)とほぼ数量が一致している。ただし、「獸十三種」が示す動物はなく、「禽三十一品」に当てはまる鳥類も一種のみとなっており、代わりに『蝦夷草木写真』では虫一二種と魚類一種が収められている。『元旦日記』の記述と『蝦夷草木写真』の内容及び数量が完全に一致しているわけではないが、特に草木や海草、貝類について数量が近似することは、元旦の道中でのスケッチが、この『蝦夷草木写真』に活用されている可能性を高めてくれるだろう。そして『見聞略草稿』を文面通りに解釈すれば勝景図と人物・器物図以外の写生図、すなわち草木、海草、獸、禽、貝類は幕府に提出し、島田家にはその草稿も残っていないということがわかる。このことは、『蝦夷草木写真』の写本が少ないことも齟齬を来たさない。

このように整理してみると、『元旦日記』の記述と現在に伝わる資料の内容はほぼ合致し、数量の面ではどのように数えるかで数字が増減するものの、ほとんどの品目でほぼ一致していることを示すことができた。すなわち元旦の蝦夷地調査の成果は、写本のかたちでしか残されていないものも含めれば、おおよそ今に伝わっており、蝦夷と奥羽の風景・人物・器物・草木・魚介類と禽獸(もしくは虫魚)を描いたということがわかる。そして数量の点からは、「奥羽勝景」に欠失している部分が五〇図ほどあることも推定され、写本でしか伝わらない『元旦日記』や『蝦夷草木写真』などととも原本(自筆本)の発見が期待される。

第三章 蝦夷地調査の成果の特徴とその要因と青年期の状況から

以上、第一章で元旦の蝦夷地調査における成果資料一二種を紹介、整理し、第二章にてそれらを『元旦日記』中の記述と対照させて全体像の把握に努め、当時元旦が手がけたものは写本でしか遺っていないものも含めればほぼ今に伝わっていることを指摘した。最後に第三章において、当時の元旦の状況を鑑みながら、これらの資料にみる特徴の生成要因を探ることとする。

(一) 文晁の弟として

はじめに、元旦が生まれた谷家について簡単に触れておくこととしよう。元旦の父・麓谷は田安家の家臣で、漢詩人としても知られており、文晁はもとより姉・舜英や紅蘭、文晁の妻の幹々も画をよくし、舜英が嫁いだ中田察堂は漢詩人と、谷家親族は芸術一家であった。元旦は一五歳の年の差がある兄・文晁をはじめ、年長者である彼らの大きな背中を見ながら、様々な刺激を受けて自らの画才を伸ばしていったのである。特に元旦の青年期(一〇代から二〇代)は寛政年間(一七八九〜一八〇一)にあたり、文晁の画業の中では、いわゆる「寛政文晁」と呼ばれるもつとも充実した時期であった。この時期の元旦の作品をみれば、文晁に就いて画技の習得にあたっていたことがうかがえ、また初め名を「文啓」として「文」の字を冠していることから文晁の門人という位置付けが推測される。この元旦の青年期における文晁の影響についての詳細は拙稿²⁸⁾を参照いただきたいが、残された作品からは、当時元旦が画家の北山寒巖や儒学者の頼春水、林述斎といった人々と交わっていたことがわかる。そして、彼らの多くが松平定信と非常に近い立場にあることから想像されるように、元旦自身も定信と接見の機会を複数得ており、元旦が兄・文晁のもつ幅広い交流の輪の中にいたことが判明する。元旦は文晁の高弟の一人として兄の強い影響を受けながら画技の研鑽に励んでいたことがうかがえるが、それは元旦の蝦夷風景写生図にも色濃く映し出されている。例えば『蝦夷山水図巻』では山や岩を表現するのに、薄墨を刷いて影を作り立体感を表現しているほか、岩の峻を内側から外側へと平行に重ねる特徴的な描写が見られるが、こうした手法は寛政五年(一七九三)に谷文晁が制作した『公余探勝図』(東京国立博物館蔵)にみる描法などと類似する(【図35・a】と【図35・b】)。また、「ニイカツフヘツ図」にみる色調のコントラストを強く付けて岩の凹凸を執拗に表す筆法は、同じく

『公余探勝図』の「白濱二」などにおける癖の強い表現と近い感覚を持っている(【図36・a】と【図36・b】)。T字状に形式化させた松樹の連ね方も『公余探勝図』や寛政一年の『相州名勝図帖』(東京国立博物館蔵)などに随所に見られる描法であるし(【図37・a】と【図37・b】)、『画稿』にみる広葉樹の点描は、『公余探勝図』上巻「太平瀑布図」にみる銅版画のような点描と色面による陰影表現や、「青羽根村南望」などにおける広葉樹の描き方から派生していると考えられ(【図38・a】と【図38・b】)、元旦が文晁から風景写生図の描法を学んでいたことがわかる。また、『蝦夷地真景図巻』中の「エサン図」(【図17・b】)にみられる、細い墨線を重ね、薄墨や淡彩でグラデーションを付けて山の立体感や凹凸を表す筆法にも、西洋絵画の影響が見られ、文晁の『公余探勝図』との関連を見ることができよう。

そのほか『元旦日記』には、元旦の風景への強い関心と風景を愛でる気持ちが随所に表れており、たとえば、「予、景色を貪、道を山中に取んとするに、行李ども皆、浜辺を先へ行たり」(六月一三日)、「岡へ上り其風景を貪りて、予は又独のこる」(八月三日)など、風景、特に山中の景色を積極的に捉えようとする姿がうかがえ、風景を享受する喜びを知っていることを自負する節も感じられる。そして、「夷人の家、山陵深林の間に点在す。予、雲煙の巧みなる事、初めて此に知る。『画とする所の心得にもなるべし』と感じける。」(八月三日)といった記述には、元旦が画家を自認していることや、山々が見せる美しい自然風景を心に留めることで、旅を通して自らの画囊を肥やそうとする意気込みをうかがうことができる。こうした元旦の姿は、文晁の「余自幼好山水、漫遊四方、每遇名山大川、必図而収焉」(『日本名山図会』序文、読点筆者)といった態度と共通する。しかしこうした実景を愛でる思潮は文晁に限ったことではなく、定信をはじめ、紀州藩主徳川治宝や熊本藩主細川斉茲などの大名や富裕な商人たちの「山水癖」とも呼ばれる風景愛好の志向の高まりという時代の潮流のひとつであった²⁹⁾。彼らは熱心に各地の風景写生図を描かせ、文晁はその制作の代表的な担い手であったが、『元旦日記』にみえる各地の風景を愛で、貪り、浜道よりも山道を行こうとする元旦のただならぬ関心の強さには、元旦もそうした文化的潮流の中にあつたことが如実に示されている。



【図35-a】『公余探勝図』上巻「豆州水晶山」
(東京国立博物館蔵)



【図35-b】『蝦夷山水図巻』1-13「エトモ海上眺望図」〈部分〉
(北海道立近代美術館蔵)



【図36-a】『公余探勝図』下巻「白濱 二」
(東京国立博物館蔵)



【図36-b】『蝦夷山水図巻』2-10「ニイカツヘツ図」
(北海道立近代美術館蔵)



【図37-a】『公余探勝図』上巻「下田港」〈部分〉
(東京国立博物館蔵)



【図37-b】『蝦夷山水図巻』1-11「大沼嶺眺望図」〈部分〉
(北海道立近代美術館蔵)

(二) 京畿への旅行―兼葭堂に関連して

続いて、元旦の蝦夷地調査において、元旦が蝦夷地に渡る以前に旅した京畿における二人の人物との関わりが大きな影響を与えていると考えられるため、そのことについて触れておきたい。

まず鍵となる一人目は、大坂の木村兼葭堂(一七三六―一八〇二)との接触である。江戸に生まれ育った元旦は、寛政五(一六)年、一六(一七)歳のときに彼のもとを一回以上訪れていることが『兼葭堂日記』の記述からわかる。画家で漢詩人でもあると同時に博物学者として全国にその名を広く知られたこの知識人は、膨大な蔵書や美術品、古物や珍奇なありとあらゆるものを蒐集していた。彼は学者や大名など当時の名だたる蔵書家とも深い交流があり、彼らから書籍の貸借・寄贈を受けて、情報の交換と蔵書の充実をはかっていたが、現在東京都立中央図書館が所蔵する『蝦夷風俗図式』・『蝦夷器具図式』(以下、日比谷本、【表2】の(イ))には、「兼葭堂蔵書印」という印が捺されていることから、兼葭堂の旧蔵本であったことがわかる。この日比谷本は、人物や器物、風景などすべての大きさや配置が自筆本と寸分違わず一致しており、自筆本を丁寧かつ正確に敷き写ししたと考えられる写本となっている。元旦が蝦夷地調査以前に兼葭堂と面識をもっていたことを鑑みると、日比谷本は元旦が兼葭堂のために敷き写した(あるいは敷き写しさせた)可能性が高いだろう⁽³⁰⁾。尾張藩陪臣の水野正信が写した『蝦夷紀行』(蓬左文庫蔵、【表2】の(コ))は紀行文と積名、『蝦夷風俗図式』と『蝦夷器具図式』、『蝦夷器図式』の五種が揃ったものであるが、『蝦夷風俗図式』の中に、「此一図ハ難波人兼葭堂蔵画巻ノ抜粋也」と記された小熊狩獵図が入り込んでいる。この図がどのような経緯で加えられたのかは不明ながら、元旦から兼葭堂へ、そして兼葭堂の情報はまた別の文化人へと広がっていることがわかる。これらにみる写本のルートからは、元旦の蝦夷地調査の成果の伝播に兼葭堂が大きな影響力を持っていたことが想像される。『元旦日記』と共通する内容が多く記す渋江長伯の『東遊奇勝』の写本が少ない一方、『元旦日記』の写本が大変多いのは、両者の立場の違いの他、元旦が兼葭堂や文晁といった交流の中にあつたことも関係していると考えられる。

さて、一〇代にして当時を代表する博物学者の兼葭堂と接触を持った元旦の中には自ずと考証的・実証的精神が育まれていたとみえ、『元旦日記』には、随所にその精神が顔を覗かせている。たとえば、道中通過した地名の由来を

記し、それに対し「いかゞ」と一文挿入して疑問を呈したり(三月二五日、二六日)、安部貞仁の時代の首塚にまつわる言い伝えに対し、「不審」と感想を述べ、さらに佐々木高綱がここを破り取ったという伝聞に対しても、「貞仁時代の事にはなく、其後鎌倉よりの軍の時の事か、何か時代をとり交えてふと聞へたり」と考証を加える(四月二日)。同月五日には、「往古、松浦佐よ姫、越を掛休みしゆへ、休塚村と云ひ、其所に塚ありて今其うへに松の木ありと。来歴は不審。」(傍点筆者)といった具合に、来歴の信憑性を問うている。蝦夷地滞在時には菓草の生育と土との関係を分析したり(七月一日)、帰路では仙台の陣立が正月三日に行われる由来に対し、「然れどもかやうなる事、土俗の咄し姓名など、又は事実の取違へも有事ゆへ、治定の説には用ひがたし」(傍点筆者)と、非常に客観的な視点を有していることがわかる。元旦自らが加えた考証に深い学究性はみられないが、由緒や来歴に対する強い関心と、客観性のある事実を重んじる実証的態度は、本紀行に一貫して見受けられる大きな特徴となっており、兼葭堂を始めとする当時の博物学的姿勢と軌を一にしている。

そしてこうした姿勢は、元旦の『蝦夷風俗図式』にも特筆すべき表現となつて表れている。それは、『蝦夷風俗図式』中に描かれた四人の男女の半身像にみられる(【図39】)。そこには彼らの名前と写生した場所(あるいは彼らの出身地)が記され、うち二図には年齢も付記されているのであるが、年齢や性別の異なる人物を選んでいること、また場所や年齢の表記からは、実見に基づいた客観的事実を提示する姿勢がみられ、また氏名も記すことで、概念や主観に基づくのではなく、アイヌの人々の個々へと視線が向いていることがうかがえるのである。これはアイヌ風俗画の歴史全体を見渡せば非常に稀有な例であることがわかるだろう。アイヌ風俗画家の代表である村上島之允が記した『蝦夷島奇観』においても、一個人の男性を描いたものはあるが、主眼は伝統や風習を紹介することにあり、アイヌの人々の地位や年齢、地域による個別化を図ろうとする意図は見られない⁽³¹⁾。元旦は、名前を持たない典型的な「アイヌの人」として描くのではなく、各人を一個人として捉えていることがわかる。そこには、元旦の客観性が現れていると同時に、性別や年齢による分類学的態度も垣間見えるだろう。その一方で新明氏が指摘しているように⁽³²⁾、各肖像の画面上部に大きく余白を取り、描かれた人物に威厳をもたらす効果を与える肖像画の手法をアイヌの人物画に適用させてい

るといった点には、元旦の絵の素養が表れている。

さて、ここまで兼葭堂との関係とその影響について見てきたが、元旦が兼葭堂のもとを訪れた目的としては、どのようなことが考えられるだろうか。文晁が兼葭堂を初めて訪問するより三年も前に元旦が接触をもっていることから、何か緊急の、あるいは重要な役目を元旦が担っていたのではないだろうか。本稿では推論として、元旦が文晁の高弟として定信とも関わりがあったことを考え合わせ、海防に関連した情報収集と、『集古十種』編纂という二つの目的があった可能性を挙げておきたい。

まず、海防関連の情報収集であるが、日本や中国、そして西洋の産物や地図などの収集にも熱心であった兼葭堂は、アイヌの弓矢や矢筒などの物産はもとより蝦夷の地理や異国への方角・距離などが詳しく記された蝦夷地図も秘蔵するなど、当時蝦夷地の情報に最も詳しい人物の一人としても知られていた³³。天明七年（一七八七）から寛政五年まで老中を勤めた松平定信は、寛政元年にアイヌが蜂起して和人を殺害するという事件が起こった際には隠密として青島俊蔵や最上徳内らを派遣し情報を集めさせているほか、寛政二年には阿蘭陀通詞で蘭学者の本木良永に国防上必要不可欠である世界地図の日本語版を提出させている。また、元旦が大坂にいた寛政五年には、近海防備のために伊豆・相模沿岸を巡視し文晁を同行させているように、定信が日本を囲む緊迫した状況を認識していたことを踏まえると、寛政五〜六年の元旦の兼葭堂訪問には、海防に有用な情報を収集する目的を想定できよう。

続いて『集古十種』編纂についてであるが、周知のとおり『集古十種』は、定信が全国各地で収集した古文化財を掲載した計八五冊にも及ぶ図録であり、この編纂のために少なくとも寛政四年から文化四年（一八〇七）までに計七回、柴野栗山や住吉廣行、屋代弘賢、文晁、白雲、大野文泉らが調査を行っている³⁴。元旦の寛政五〜六年という上京時期と、古物を多数所蔵する兼葭堂宅への訪問という点を考え合わせると、元旦の上京が『集古十種』編纂の一環である可能性も考えられるだろう。

『元旦日記』には、元旦が寺社やアイヌの長老らが所有する宝物に対して強い興味をもち、古物を愛でていたことがうかがえ、奥羽街道の道中では赤石大明神（志賀理和気神社）の鳥居の銘を記し（四月八日）、三廐の観音山の社寺にては「何ぞ古物にてもあらんや」と骨董を探索している（四月二一日）。蝦夷地に渡ってからも、アイヌの長老が所有する古物を見る秘策を最

上徳内に聞いたたり（七月二二日）、虻田への移動中、同行の者たちが先に舟に乗って行く中、有珠善光寺の堂内に安置された釈迦仏の銅像を一人残って写生したりしている（八月三日）。さらに八月二二日は知内の神主が所蔵する古い鰐口を拓本に取るなど、積極的に古物を写生していることがわかる。またそうした古物に対し元旦は、「尤古色愛すべし。土中より出たるもの、やうに見へる也。」（四月一日）、「古色可愛。」（四月晦日）、「古色、甚だ愛するにたれり。」（五月一日）とその古びた様を愛でており、鑑識眼を有していたことも知られる。このように、紀行文の随所に元旦の古物の情報収集への強い意欲が見て取れるが、寛政五〜六年の京畿への旅行において、元旦が『集古十種』編纂のための情報収集という役割を担っていたとすれば、こうした関心が生まれるのも当然のことと思われる。そして興味深いことに、元旦は蝦夷地から江戸への帰途、同行の人々と離れ奥州街道を一人逸れ、文晁門の画生で松島や塩竈周辺の古跡をよく知る庄蔵という案内人とともに各所を回り、多賀城で古瓦を探したり、仙台市岩切では信田小太郎の石碑を三つ見てそのいわれについて詳細に書き留めたりしている（九月二八日）。定信が膨大な数の古瓦を収集していたことを考え合わせれば、元旦の採集した古瓦は定信に提出するものであった可能性が考えられ、『集古十種』の第二巻に収める「碑銘」の部を開けば、そこに収められた「信田小太郎古館跡碑」、「信田小太郎古館跡岩切山碑」、「岩切山碑」の三つの拓本が元旦の蝦夷地調査の帰路における収集である可能性が提起されるだろう。すなわち、元旦の蝦夷地派遣の裏には、古物収集という別の使命も帯びていたと想像され、そうであれば『元旦日記』の随所に看取れた元旦の古物の情報収集への強い意欲と、松島周辺での大胆とも言える単独行動の理由も頷けるのである。

（三）京畿への旅行―応挙に関連して

元旦の京畿旅行を考える上で二つ目の鍵となるのは、円山応挙（一七三三〜九五）との関わりである。明治の終わりから昭和の初めにかけて編纂された『鳥取藩史』に収められている元旦の孫・島田真浄氏による口伝には、兄の文晁に諫められた元旦が反抗して上京し応挙の門を叩いたという風に伝えるが、現在のところ元旦の応挙訪問の事実を示す確実な資料は残っていない。しかし、応挙の一三回忌の追善のために開かれた展覧の記録『展覧画録』（文化四年）に元旦の名が連なっているほか、文政一二年（一八二九）には京

の円山主水を尋ねているなど⁽³⁵⁾、元旦と円山家とのつながりがうかがえる。そして何よりも元旦の蝦夷地調査の成果である『蝦夷風俗図式』にみる人物の表現は、明らかに文晁の画風とは異なる、応挙風の写実的な身体表現が採られているのである。

たとえば『蝦夷風俗図式』中の「蝦夷童子遊戯図」には、童子の着衣の下の体の線がうっすらと見えており(【図40】)、腕や足の動きに合わせて衣の線を重ねていることがわかる。こうした裸体の上に衣装を付けていくという画法は、一般には応挙が伝えたものとして広く知られているが、古くは中国の元時代後半から明時代初にかけてあったことが指摘されており、また日本においても江戸時代中期の京狩野の画伝書に示されるなど、応挙の創始によるものではない⁽³⁶⁾。しかし、「蝦夷男女風俗図」の子どもの姿(【図41】)にみる丸みのある柔らかな線や肉感的な表現からは、応挙の大乗寺障壁画にみる童子(【図42】)の姿などが想起され、写実を徹底的に追求した応挙の自然な人体表現との関連性が看取される。また、【図39】におけるアイヌの男女の肖像画においてみられた、各人の年齢や特徴を写実的に表現し、個々の差異を明確に捉える観察眼は、応挙が老若男女、貴賤さまざまな人物を写生に基づいて描き分けた科学的で客観的な眼差しとも共通しているだろう。このように、『蝦夷風俗図式』にみる人物の表現からは、元旦が応挙に通じる写実的な技法を学習し、身につけていることが察せられ、寛政五、六年の上方滞在時に円山家を訪問し、応挙もしくは門弟による指南を受けたのではないかと推察される⁽³⁷⁾。

また前述のように、『毛夷武餘寫図』では応挙の「四条河原納涼図」から構図を借用しており、元旦が応挙の作品を見ていたことが知られる。そして「四条河原納涼図」には、人物の配置や数、姿態が全く同じ下図があり、その下図には人物の着衣の下の体躯の線が未だしっかりと描かれ、応挙の人物図の制作過程を知ることができるものとなっている。元旦が数ある応挙の作品の中でこの「四条河原納涼図」から人物の配置と姿態を借りていることは、元旦の写生画学習と応挙との関わりを考える上で非常に示唆的である。

さて、元旦が応挙を訪問した目的については、あくまで想像の域を出ないのであるが、文晁が応挙亡き後に京を訪れた際、円山応瑞宅にて南禅寺が蔵する牧溪作品の模写を観たり、応瑞や呉春らを仲介として智恩院や妙法院の古器物を拝観するなど、京の有力寺社の宝物を見るのに円山四条派の画家

たちの力を借りていることから、先の定信の『集古十種』と関連し、元旦がそのような古物の収集にあたって円山家との接触をもった可能性が挙げられる。あるいは、寛政五年に定信が文晁に『公余探勝図』を作らせ、文晁はそこで西洋の影響を受けた遠近法や陰影法を駆使して、より写実的な風景の再現を試みたように、元旦も文晁、もしくは定信によって応挙の合理的な人物描写法の習得を求められたのかもしれない。定信は文晁の他にも、寛政六年に亜欧堂田善を召し抱えて銅版画や西洋の画法を修得させているほか、津山藩のお抱え絵師となっていた鋤形蕙齋には『東都繁昌図卷』(享和三年へ一八〇三)や『近世職人尽絵卷』(文化元年、東京国立博物館蔵)を制作させるなど、風俗画への関心も高かったことがうかがえるのである⁽³⁸⁾。

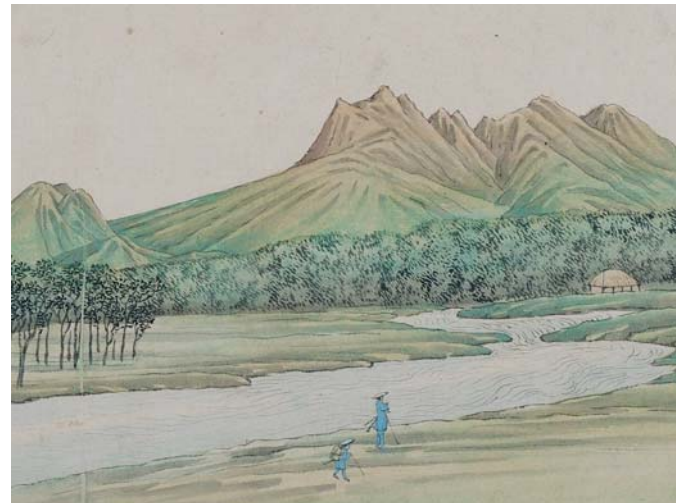
以上、『元旦日記』にみられた風景愛好の思潮や、考証的態度、『蝦夷風俗図式』におけるアイヌの人々への客観的視線と分類への志向は、文晁を兄にもち、定信とも近い関係にあり、兼葭堂や応挙らとも接し得た環境の中で養われた同時代的感覚であり、また、元旦の蝦夷地派遣には、定信の古物収集という使命も帯びている可能性を提示してきた。そして、『蝦夷風俗図式』にみる人物の写実的な体躯の描写は応挙から学んだと考えられるもので、元旦の上京時における応挙師事の説を補うものとなっている。

おわりに

本稿では、元旦が手がけた紀行文や風景・器物・風俗・植物などの豊富な図画資料を整理することで、蝦夷地調査における成果の全体像を把握するとともに、その多くが今に伝わっていることを紹介してきた。また、蝦夷の風景写生図における描法からは、元旦が文晁を手本としていたことを知ることができ、『元旦日記』にみる風景を貪る態度は、文晁とともに定信や周辺の知識人たちとも接しうる環境にあったことから自然と培われた風景愛好の趣味の顕れであると考えられた。そして、蝦夷に派遣される以前の寛政五、六年に京畿へ旅行した背景には文晁や定信の存在が感じられ、兼葭堂との接触には海防のため、あるいは『集古十種』編纂のための情報収集といった目的が想定され、『元旦日記』にみられる元旦の考証的精神は、このような知識人との交流を通して育まれたことが想像された。そして、アイヌの人々を描いた風俗図には応挙の影響が看取され、現在のところ伝聞のみ伝わる元旦



【図38-a】『公余探勝図』上巻「青羽根村南望」〈部分〉
(東京国立博物館蔵)



【図38-b】『蝦夷山水図巻』2-3「シキウヘツ図」〈部分〉
(北海道立近代美術館蔵)



【図39】『蝦夷風俗図式』肖像画 (個人蔵)



【図42】円山応挙「郭子儀図」〈部分〉
(大乘寺蔵)



【図41】『蝦夷風俗図式』
「蝦夷男女風俗図」〈部分〉
(個人蔵)



【図40】『蝦夷風俗図式』
「蝦夷童子遊戯図」〈部分〉
(個人蔵)

の滞京時における応挙師事説を補うものとなっており、その背後に定信による写実的人体表現の学習の求めがあった可能性をみた。このように元旦が蝦夷地調査で残した資料群には、文晁から学んだ洋風表現を取り入れた風景写生法や応挙から学んだ科学的な人体の描写法などが駆使されているほか、風景の愛好や博物学にみる実証的精神など、その時代の潮流が如実に表れている。

元旦が蝦夷地へ渡る前後は、諸外国に対する認識の強まりの中で測量技術や透視図法などの理解が日進月歩で進み、寛政一二年には伊能忠敬が蝦夷地へ赴き精密な実測図を制作、文化年間には銅版画の技術を習得した田善によって西洋の遠近法が日本の実景に的確に応用されている。こうした図画に比すれば、海防や開発に供するために制作されたであろう元旦の風景写生図は多分に牧歌的であるが、幕末の蝦夷風景図にも引用され、時代を越えて活用されるなどその意義は大きく、またその絵画的要素の強さから、画家の創造性が感じられる魅力を有している。

元旦は、文晁の弟として江戸に生まれ、年若くして文晁の幅広い人脈とも関わり、兼葭堂や円山家とも接点を持ちうる環境にあったことよって、博物学的精神を培い、物のかたちを写実的に捉える視点と技術を得たのであり、さらに風景や人物、器物等を正確に描き出す画才にも恵まれたことにより、その環境を活かすことができた希有な存在であった。元旦の蝦夷地調査は短期間であったにもかかわらず、このような要因が重なることで多彩な成果を生み出し、さらに多数の写本によつて情報が広く伝播され、社会・文化両面で活用されて長く影響を与え続けたのである。

謝辞

作品の調査及び図版掲載にあたりましては、各作品の所蔵者の方々ならびに各機関より御協力・御高配を賜りました。また、本稿執筆にあたりましては、北海道立開拓記念館池田貴夫教育普及課長兼学芸第二課長、北海道立文学館新明英仁学芸主幹、仙台市博物館内山淳一主幹兼学芸室長には大変貴重な御助言を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

① 島田(谷) 元旦筆『蝦夷蓋開日記』(『元旦日記』)より。羽太正養編『休明光記』巻之一(『新撰北海道史』第五巻、北海道庁、昭和十一年)には「上下都合四百餘人、

寛政十一己未年四月、江府を發して追々東蝦夷地に至りぬ」とある。

② 上野益三『日本博物学史 補訂』(平凡社、昭和四八年)中の年表より。

③ 明らかに誤謬があると思われる場合は一部改めた。

④ 函館市立図書館(請求記号○○〇八―三四一九三―五〇〇一)、北海道庁(一八〇三―一八〇四)、北海道庁(〇九五五―〇九五六)、アイヌ民族博物館、北海道大学附属図書館(旧記〇一八八)、北海道大学附属図書館(内閣文庫本の複写本)、国立国会図書館(二三九一四三)、国立国会図書館(一四五―一五二)、国立国会図書館(一三九一―一〇七)、刈谷市中央図書館(村上文庫六三三七)、蓬左文庫(三二―一〇三―二四〇)、京都大学附属図書館(谷村文庫)、内閣文庫(二七八―二〇二)、岩瀬文庫(二二―一三三)、天理図書館(二九一・七一・二七)、鳥取県立図書館(二九〇―六〇―郷土WH、国会図書館本の写本)等

⑤ 鶴岡明美「目賀田守蔭筆〈蝦夷歴検真図〉について―文晁派実景図の系譜―」(『人間文化論叢』第七号、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、平成一六年)参照。
⑥ 天野太郎「蝦夷山水図巻について(二)」(『北海道立近代美術館紀要』第八号、昭和六一年)、『蝦夷の風俗画―小玉貞良から平澤屏山まで』展図録(北海道立旭川美術館・北海道立近代美術館、平成四年)作品解説
⑦ 『写山楼谷文晁』(栃木県立美術館、昭和五四年)の「谷文晁印譜」に類印があるが、やや異なっている。

⑧ 前掲註6 天野氏論考

⑨ 前掲註6 天野氏論考

⑩ 内山淳一「失われたみちのく図巻―谷元旦・大野文泉の東北地方写生図をめぐって―」(『仙台市博物館調査研究報告』第二十九号、平成二二年)

⑪ このほか佐藤慶二編『蝦夷奇勝図巻』(朝日出版、昭和四八年)には、元旦の作として蝦夷風景図の複製が二六図収められているが、材質や寸法等が未記載で、現在の所蔵も不明であるため、実物にあたることができない。また、複製画に見られる岩などの表現が元旦の筆とは異質であるため、ここでは除いた。

⑫ 『唐太島東西浜図』(函館市中央図書館蔵)の豊章自身による書き入れより。

⑬ 元旦同様に多くの図画を中心とする執筆を行っていたことは、『蝦夷草木図』、『蝦夷見取絵図』(国立公文書館蔵)、『蝦夷カラフトサンタン打込図』(早稲田大学図書館蔵)など現在に伝わる資料からもうかがうことができる。

⑭ 『休明光記』巻之一(『新撰北海道史』第五巻史料一(北海道庁編、昭和十一年)所収)大塚和義監修『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式』、安達美術、昭和六六年

⑮ 「蝦夷人鶴舞図」に描かれた二〇人を含む。

⑯ 村上島之允は元旦の蝦夷地派遣より一年早い寛政一〇年、幕府の蝦夷地調査に御雇いとして松前から函館、襟裳岬から釧路、根室、クナシリ島、エトロフ島に渡り、

行程の記録や方位の測地を行った。島之允はその後もたびたび江戸と蝦夷を往来し、『蝦夷島奇観』（東京国立博物館蔵）や『臘臍臍図説』、『蝦夷鬚髮図説』など蝦夷の風俗に取材した絵図を多数制作、それらは各地に住むアイヌに接した結果生まれ得た洞察力の富んだ内容となっている。

¹⁸ 北海道大学附属図書館が所蔵する『蝦夷記行図』（旧記〇〇五三）の最初の二図以外は元旦の筆とされている（新明英仁『アイヌ風俗画』の研究―近世北海道におけるアイヌと美術―一七六―一七七頁〈中西出版、平成二三年〉）が、本稿ではアイヌ民族博物館所蔵の『蝦夷紀行』と比較した結果、描写の内容や技量に大きな差はなく元旦の筆と断ずる根拠に乏しいと思われるため、両本とも原本に忠実な初期段階の写本であると判断した。

¹⁹ アイヌ民族博物館所蔵本より抜粋した。

²⁰ 大塚和義「稿本の成立事情とその書誌的検討」（前掲註15所収）より。

²¹ 大塚和義「谷元旦『毛夷武餘寫図』について」（『民博通信』第五七号、国立民族学博物館、平成四年）

²² 前掲註18新明氏著書（二二五―二二九頁）

²³ 渋谷長伯『東遊奇勝 帰路編』（山崎栄作編、平成一八年）所収の解説（四一四頁）にも「新甫遺稿」（無窮会蔵）の記述から「採取した標本につき長伯が指示を与え、新甫が記録し、谷元旦が写生するという仕事の分担が窺える。採葉の在り方はかなり組織化されていたと知られる。」と指摘されている。

²⁴ 『採葉志一』（近世歴史資料集成第二期第六巻、科学書院、一九九四年）に影印あり。

²⁵ 各写本の成立時期が明らかなものはないため、成立時期順とはしていない。

²⁶ 『見聞略草稿』で「元旦紀行」と記されているのが『元旦日記』のことを指すのであろう。

²⁷ そのほか、『鳥取藩史』（鳥取県編、昭和四五年）の元旦の項目には次のように記される（傍線筆者）。「蝦夷に入り、山川草木・禽獣蟲魚・風俗人物等、凡そ脚の踏む処目の触るゝ処之を模写し、之を図録す。旁ら其の土語を採輯し、以て数軸をなし、還て之を報告す。其の底本五軸、嶋田家之を伝へ以て維新後に至りしも、今之を失すと云ふ。」これは元旦孫の島田真浄（信浄、一八四七―一九一七）の談と考えられるもので、『見聞略草稿』と併せ文字通りに捉えれば、次のようになる。①嘉永六年頃までは、蝦夷と奥羽の勝景図六軸と人物器物四品の計一〇種が島田家に伝えられていた。②その後、うち五種が散逸し、残る五種は明治維新後しばらくの間、島田家に所蔵されていた。③その五種も大正六年（一九一七）までに島田家の手を離れた。

最後まで島田家に残った五軸が具体的にどの資料を指すかは不明ながら、現在自筆本として鳥取に伝わる『画稿』三巻と『蝦夷風俗図式』ならびに『蝦夷器具図式』

の二品の計五種を指す可能性も考えられよう。

²⁸ 拙稿「島田元旦の青年期における文晁の影響について」（『鹿島美術財団研究報告書』、鹿島美術財団、二〇〇八年）

²⁹ 山水癖については、内山淳一「江戸の風景趣味―広重『東海道五拾三次』の土壌」（『S』第七五号、ポラ文化研究所、一九九七年）、内山淳一「山水癖の絵画―谷文晁筆『東北方写生図』をめぐる―」（『国華』第一三五五号、朝日新聞社、平成二〇年九月）等に詳しい。

³⁰ 元旦と同じく採葉隊の一員であった土岐新甫は、蝦夷地へ渡る直前の寛政一一年一月二八日から二月二六日まで八回と、蝦夷地から江戸に戻って約半年後の寛政一二年四月八日以降にしばしば兼葭堂を訪れている（『兼葭堂日記』）ことから、元旦の調査成果は新甫の手で兼葭堂に届けられたのかもしれない。

³¹ 『蝦夷島奇観』古説部一の「男夷圖」および「女夷圖」。祭りの際の酋長の衣装や髪型、宝飾品を身につけ織道具を持つ女性の姿が、個人を断定せずに描かれている。また、「ホインカル」という名の男性の姿を描いているが、主眼はアイヌの風習である「神髪」（子の誕生が神への祈りによって叶った親が結う髪型）を紹介することにある。

³² 前掲註18新明氏著書（一九五頁）

³³ 水田紀久「資料紹介『傾蓋漫録―伊勢の兼葭堂―』（『金蘭短期大学研究誌』二〇号、金蘭短期大学図書委員会編、昭和六四年）、嘉数次人「兼葭堂の本草学・物産学管見」（『木村兼葭堂 知の巨人』、大阪歴史博物館編、平成一五年）等

³⁴ 小林めぐみ『集古十種』の編纂―その目的と情報収集』（『集古十種―あるく・うつす。あつめる。』松平定信の古文化財調査、福島県立博物館、平成二二年）

³⁵ 『江戸家老日記写』（鳥取県立博物館蔵）の文政二二年一〇月七日の記事には、「伊勢え寄参宮致し度、并、京都河原御殿内谷齋宮、四条柳馬場圓山主水、大坂高麗橋通大橋久右衛門儀、間柄二付、夫、立寄二三日宛逗留致面会度」と記されている。

³⁶ 土居次義『近世日本画の研究』（美術出版社、昭和四年）、山下善也「狩野永良の秘伝画法書について」（『学叢』、京都国立博物館編、平成二三年五月）、多田羅多起子「資料紹介Ⅱ」狩野永良『画伝集』（『美術フォーラム21』第三三号、醍醐書房、平成二三年五月）

³⁷ 人物の衣の下の身体の線を表したものが含まれる応挙原図にもとづく版本『人物描写図法』や『人物写生図冊』（個人蔵）などの存在は、応挙の門下で積極的に行っていた描法が学ばれていたことを示している。

³⁸ 定信と風俗画との関係については、内山淳一氏の御示唆によるところが大きい。ここに記し内山氏に感謝したい。

**The Documents of the Investigation in Ezo
by Shimada (Tani) Gentan**

Mayumi YAMASHITA

Abstract: Shimada Gentan (1778-1840), a younger brother of Tani Buncho (1763-1840), was born in Edo (now Tokyo). He was adopted into the Shimada Family which played an important role of the Tottori *han* (daimyo domain).

In 1799, Gentan visited to Hokkaido region called Ezo in Edo period as a member of the investigation of the shogunate. He produced a lot of documents including travelogues and sketches. These documents are valuable to research the history of Hokkaido and Ainu culture, however, it left untouched to classify these data.

In this study, I describe these documents and provide an overview of his entire results of the investigation. At the same time, I would like to add my comments on their characters and the factors why these characters had been caused in his youth.

Keywords: Shimada (Tani) Gentan, Ezo, Tani Buncho, Maruyama Okyo, Matsudaira Sadanobu, landscape paintings, Ainu Genre Paintings

*
【図42】は図録『特別展 円山応挙…〈写生画〉創造への挑戦』（毎日新聞社発行、二〇〇三年）より転載しました。